

職能に資するエビデンス研究

義肢における理学療法士の関わりの実態調査

調査対象 会員

報告書

平成 31 年 3 月

日本理学療法士学会

日本支援工学理学療法学会

目次

【要旨】	2
第1章 本事業の概要	3
第1節 背景と目的	3
第2節 実施体制	3
第3節 調査方法	4
第2章 結果	6
第1節 回収状況	6
第2節 調査結果	6
I. 基本属性	6
II. 理学療法士に必要とされる義足の知識・能力(全体)	11
第3章 結果のまとめ	31
資料	36
1. 依頼文	36
2. 調査項目	38

【要旨】

<目的>

近年、重篤な血管原性の下肢切断例が増えてきているにも関わらず、新規義足製作数が減少している傾向があり、理学療法士の義足への関わりに問題があることが予想される。義足に対する理学療法士の能力低下、関わりの減少がみられる中、実際の理学療法士の関わりの現状と不足している内容を明らかにする。その上で、今後の啓発・教育活動を効果的に実施することである。

<方法>

全国を9ブロックに分け、各ブロック3～4施設、合計30施設を対象とし、郵送での質問紙を利用したアンケート調査を実施した。

<結果と考察>

今回の調査では、前回の装具班と同様に義足の目的・種類・部品・修理等に関する知識、疾患や病態・機能解剖学・運動学等に関する知識、歩行練習や介助方法・歩行評価等に関する知識、装具による創傷対応や衛生管理に関する知識、患者・家族や他職種への説明能力、装具に関する制度や問い合わせの知識等、理学療法士に必要とされる装具の知識・能力に関する22項目についてアンケートを実施した。その結果、対象30施設のうち29施設より回答を得られた。75.9%が急性期で最も多く次いで27.6%が回復期であった。1年間の理学療法を行った下肢切断者数は1～5名が最も多く、義足のアライメント調整やメンテナンスなどにはほとんど関わらないとしていた。近年の理学療法対象の下肢切断者数に関しては急性期で「激減、やや減」とされ、回復期で「やや増」とされていた。義足のソケットや部品、断端ケアや衛生管理、装着練習、ADL指導などの知識については概ね「大いに持つべき」とされ、知識を持っているかに関しては「多少は持っている」「あまり持っていない」が大半を占めた。このギャップの要因として第1に挙げられたのがすべての項目において「対象となる患者・利用者が少ない」であり、次に「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」、「勉強会など施設内の研修会が少ない」であった。特に義足歩行に関する知識に関しては関心が高く、必要とされる項目が多かった。その反面、給付制度などに関するニーズが少ない傾向がみられた。今回の対象となった施設は理学療法士が勤務する施設の中では比較的義足作成が多いところであったが、下肢切断者の介入を行う理学療法士は10年以上であり、ある程度ベテラン理学療法士で年間に介入する疾患の中でも下肢切断者の割合は少なく、義足装着練習や義足歩行、ソケットや部品に関するニーズが高いことが示唆された。今後、日本支援工学理学療法学会では会員の知識を補えるような研修会などの企画を立てていくことが急務と考える。

第 1 章 本事業の概要

第 1 節 背景と目的

近年、下肢切断者の切断原因が外傷性から血管原性に大きく移行していく中で義足作成、装着練習にも大きな変化が見られてきている。特に高齢者に対する切断術施行や切断者が高齢化していく中で義足歩行の適応や義足作成の是非についても担当者によって大きく考え方が異なってきている。高齢者の社会制度利用の多くは障害者総合支援法から介護保険法に移行していることが多く、介護保険でレンタルされる車いすによって移動はほぼ獲得され、障害者手帳を申請することも少なくなり、義足作成に至らないケースも少なくない。さらに福祉の財源にも限界が見られるようになり、高価になりやすい義足作成に関しては積極的に推進する行政は限られてきている。しかし下肢切断者数は若干減少してきている可能性はあるが一定の水準で推移していると考えられ、義足装着をしない切断者が多くみられてきていると考えられる。日本支援工学理学療法学会では、平成 28 年度に全国の施設代表者を対象とした理学療法士の福祉用具・義肢・装具支援に関する実態調査を実施し、その中で福祉用具・義肢・装具支援に関する様々な場面で理学療法士が関与しているという結果が得られた。しかし義肢に関しては福祉用具や装具と比較しても理学療法士の関わりが極端に少なく、特定の施設によって義肢療法が行われていることが予想された。そこで今回のアンケート調査では近年、義肢製作、装着練習を行っている施設において会員の義肢に関する意識調査を行うことで今後の義肢療法の啓発や教育の在り方について明らかにすることを目的に本調査を実施した。

第 2 節 実施体制

研究責任者	半田 一登	日本理学療法士学会会長
研究代表者	大峯 三郎	日本支援工学理学療法学会代表運営幹事 九州栄養福祉大学
共同研究者（班長）	長倉 裕二	日本支援工学理学療法学会運営幹事 大阪人間科学大学
共同研究者	原 和彦	日本支援工学理学療法学会運営幹事 埼玉県立大学
共同研究者	豊田 輝	日本支援工学理学療法学会運営幹事 帝京科学大学
共同研究者	梅澤 慎吾	義肢装具サポートセンター
共同研究者	岩下 航大	義肢装具サポートセンター
研究協力者	濱本 洋典	訪問看護ステーション ラピレス

第 3 節 調査方法

1. 対象

全国を 9 ブロックに分け、各ブロックにおける義肢製作会社に対し、直接電話またはメールにより前年度、義肢製作を行った施設をそれぞれ 3～4 施設を選出し、それぞれの施設に電話によるアンケート調査に関する趣旨等を説明し、受諾した施設に対し回答者は施設内にて下肢切断者の担当経験がある任意の理学療法士とした。

2. 調査方法

調査方法は、各施設アンケート対象者から郵送による質問紙アンケートまたは Web 上でのアンケート、電子媒体によるアンケートを任意で選択してもらい実施した。

3. 調査期間

調査期間は、平成 30 年 12 月 5 日（水）から平成 30 年 12 月 25 日（火）18 時まで

4. 調査項目

設問数は 22 問で、調査項目は下記のとおりである。

I 1. 所属施設の基本的属性

2. 義足に関する項目

II 1. 義足活用の意義・目的に関する項目

2. 義足の種類と適応に関する項目

3. 義足の部品の種類と適応に関する項目

4. 義足使用に関わる疾患や病態に関する項目

5. 義足使用に関わる機能解剖学に関する項目

6. 義足の運動学に関する項目

7. 義足歩行の知識に関する項目

8. 義足の異常歩行の知識に関する項目

9. 義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力に関する項目

10. 義足を活用した歩行練習の技術に関する項目

11. 義足の必要性に関する項目

12. 義足の破損や不適合に関する項目

13. 義足使用による断端や足部の創傷と対応に関する項目

14. ソケットの汚れや除菌など衛生管理に関する項目

15. 義足の脱着方法に関する項目

16. 義足の生活関連動作活用に関する項目

17. 義足の使用に関して患者や家族に説明する能力についての項目

18. 義足の使用に関して他職種に説明する能力についての項目

19. 義足作製・修理に関する制度についての項目

20. 義足に関する相談先についての項目

5. 解析方法

得られたデータは単純集計を行い、必要に応じてクロス集計を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は日本理学療法士学会倫理審査部会の承認（承認番号 H30-004）を受けて実施した。調査対象者に対して、本調査の目的、結果の利用について案内時の電話またはメールにて説明を実施した。本調査に対する同意は調査の回答をもってみなすこととした。

7. 利益相反の開示

研究責任者、研究代表者共同研究者および研究協力者の全てにおいて、開示すべき項目はない。

第2章 結果

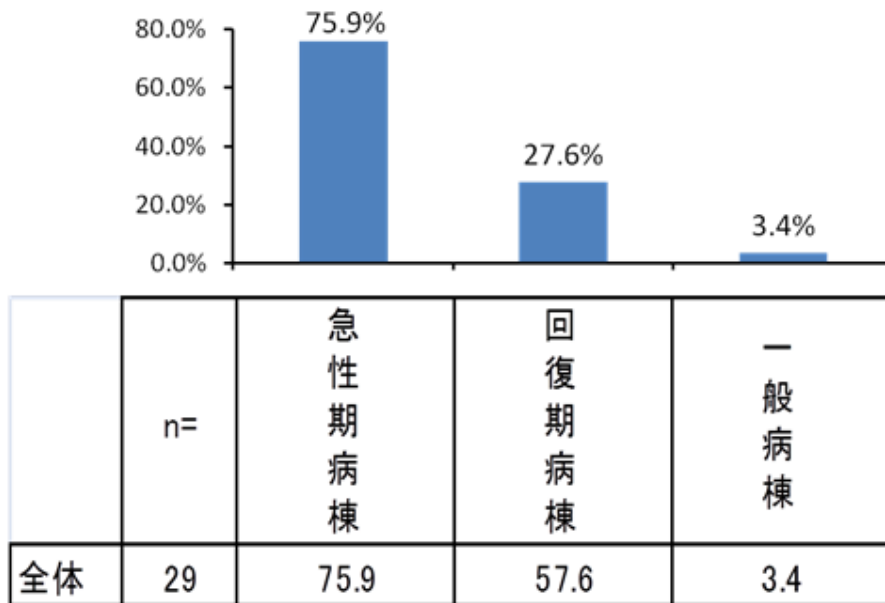
第1節 回収状況

アンケート対象施設 30 施設のうち、回答者は 29 名（回収率 96.7%）、その内、有効回答者数は 29 名（有効回収率 96.7%）であった。

第2節 調査結果

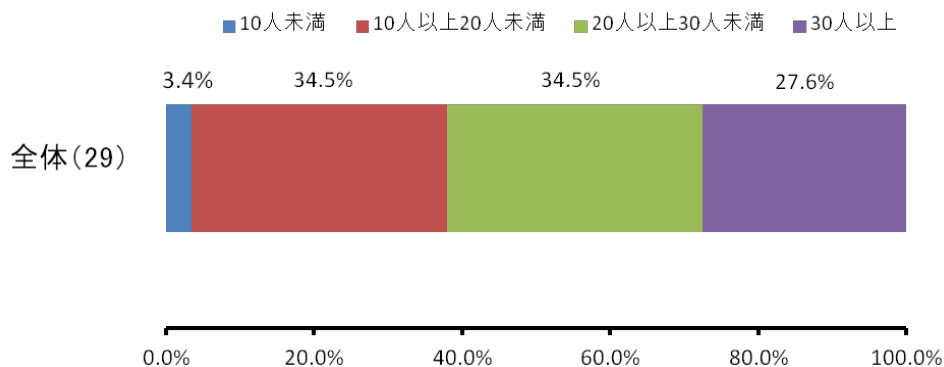
I. 基本属性

Q1.あなたが現在、主に勤務している職場の種類をお答えください。（回答は1つ）



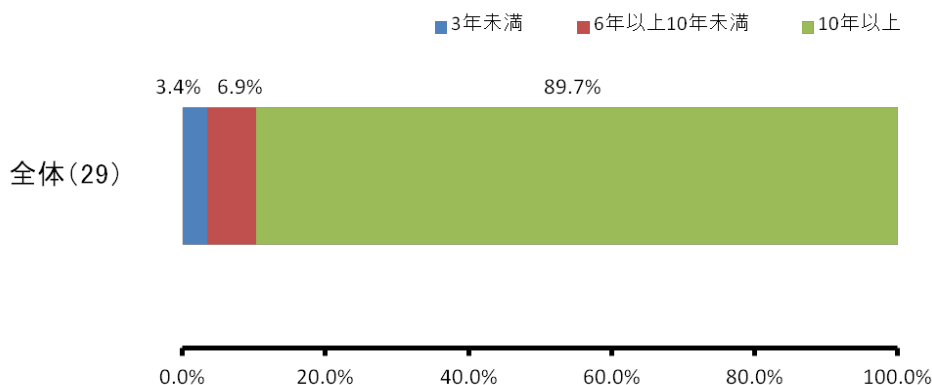
職場の種類について最も多いのは、「急性期病棟」(75.9%)である。次いで「回復期リハ病棟」(27.6%)、「一般病床」(3.4%)と続く。

Q2.前問でご回答いただいた職場の理学療法士の人数をお答えください。（お答えは1つ）



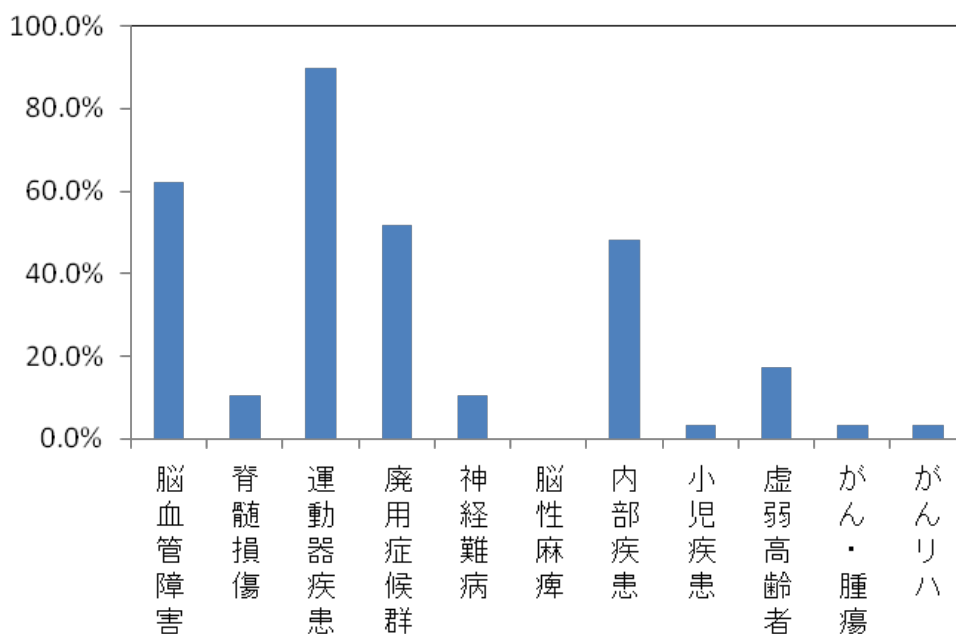
職場の理学療法士の人数について最も多いのは、「10人以上20人未満」(34.5%)、「20人以上30人未満」(34.5%)である。次いで「30人以上」(27.6%)、「10人未満」(3.4%)と続く。

Q3.あなたの臨床経験年数をお答えください(臨床業務を行っていない期間は除いてください)。(お答えは1つ)



臨床経験年数について最も多いのは、「10年以上」(89.7%)である。次いで「6年以上10年未満」(6.9%)、「3年未満」(3.4%)と続く。

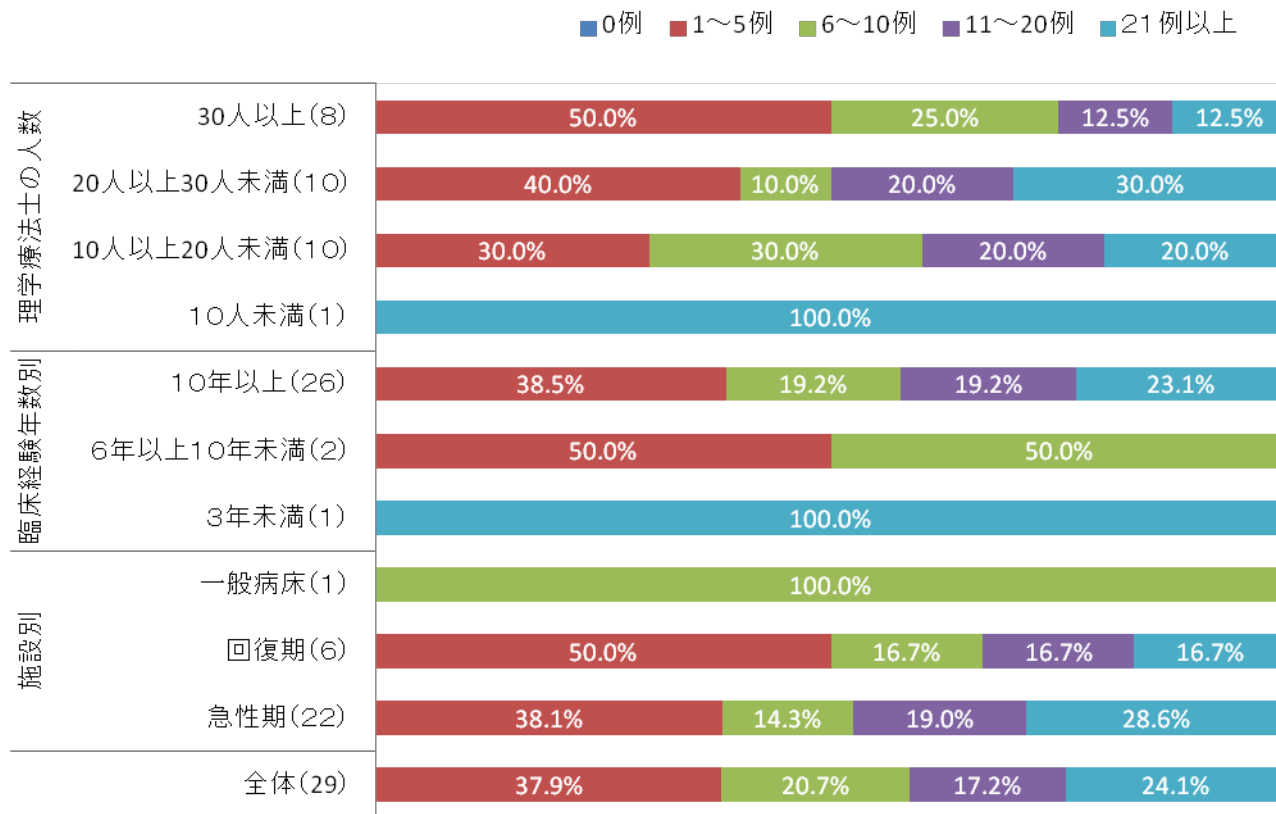
Q4.あなたが日常的に関わっている主な疾患を3つまでお答えください。



	n=	脳血管障害	脊髄損傷	運動器疾患	廃用症候群	神経難病	脳性麻痺	内部疾患	小児疾患	虚弱高齢者	がん・腫瘍	がんリハ
全体	87	62.1	10.3	89.7	51.7	10.3	0.0	48.3	3.4	17.2	3.4	3.4

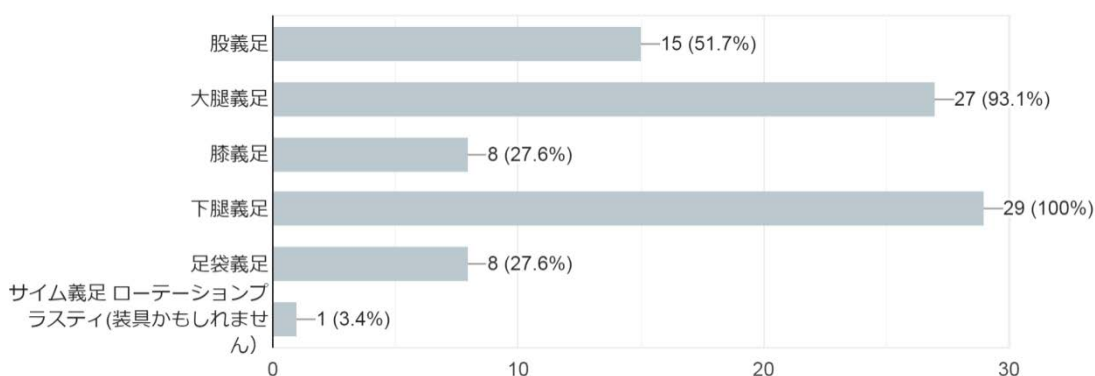
日常的に関わっている主な疾患について最も多いのは、「運動器疾患」(89.7%)である。次いで「脳血管障害」(62.1%)、「廃用症候群」(51.7%)、「内部疾患」(48.3%)と続く。

Q5.あなたの施設において前年度1年間で理学療法対象となった下肢切断は入院、外来含めて何例ありましたか。



前年度1年間で理学療法対象となった下肢切断は入院、外来含めて最も多いのは、「1～5例」(37.9%)である。次いで「21例以上」(24.1%)、「6～10例」(20.7%)、「11～20例」(17.2%)と続く。

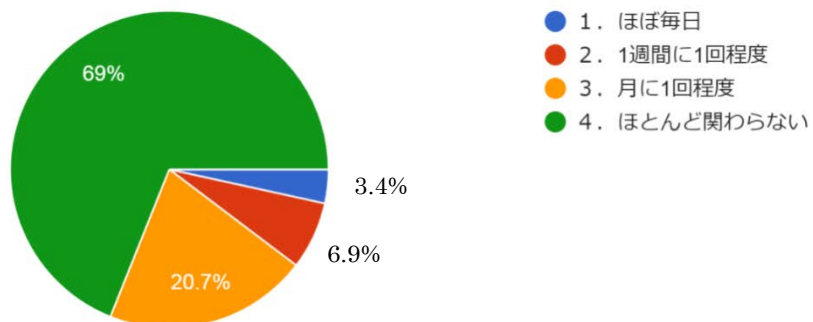
Q6.あなたが今までに関わった義足の種類についてお答えください(複数回答可)



今までに関わった義足の種類について最も多いのは、「下腿義足」(100%)である。次いで、「大腿義足」(93.1%)、「股義足」(51.7%)と続く。

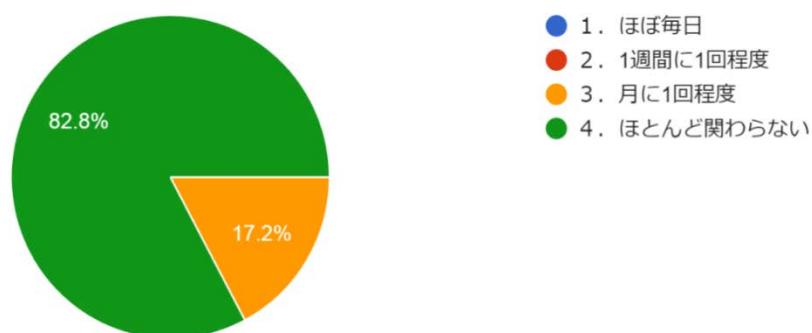
Q7.あなたが日常業務において、義足の①使用、②作製、③調整に関わることはどの程度ありますか。(③調整とは、ソケット、継手、アライメントの調整などを指します。)

① 使用



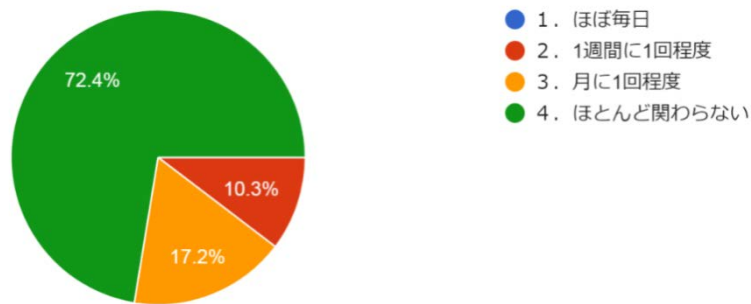
義足の使用について日常業務における関わりで最も多いのは、「ほとんど関わらない」(69%)である。次いで「月に1回程度」(20.7%)、「1週間に1回程度」(6.9%)、「ほぼ毎日」(3.4%)と続く。

② 作製



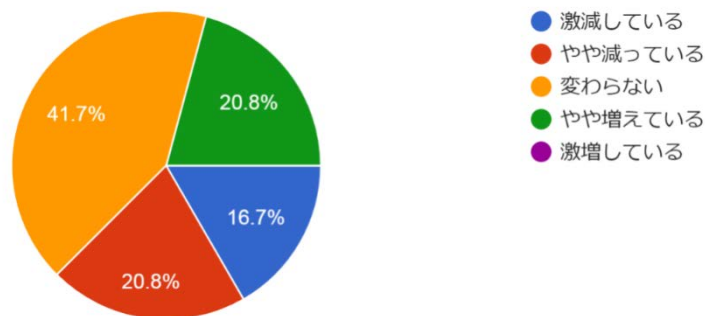
義足の作製について日常業務における関わりで最も多いのは、「ほとんど関わらない」(82.8%)である。次いで、「月に1回程度」(17.2%)と続く。

③ 調整



義足の調整について日常業務における関わりで最も多いのは、「ほとんど関わらない」(72.4%)である。次いで、「月に1回程度」(17.2%)、「1週間に1回程度」(10.3%)と続く。

③調整で「1週間に1回程度」、「月に1回程度」を選ばれた経験年数6年以上の方にお聞きします。
Q8.就職当時と比較して下肢切断者数についてお答えください。(6年以上経験の方のみ)

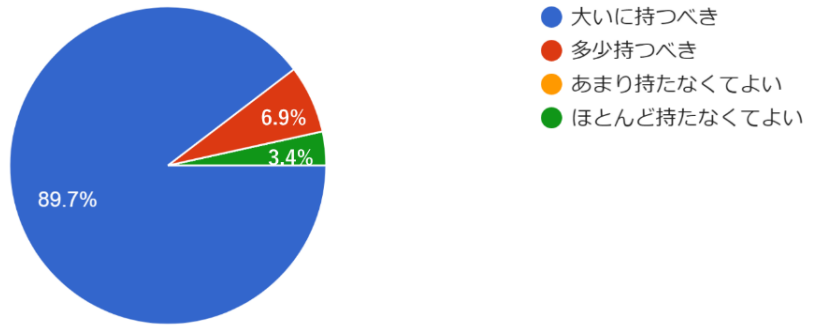


就職当時と比較した下肢切断者数で最も多いのは、「変わらない」(41.7%)である。次いで、「やや減っている」(20.8%)、「やや増えている」(20.8%)、「激減している」(16.7%)と続く。

II. 以下の義足に関するスキル（知識・技術・能力）のうち理学療法士がどの程度持つべきだと考えますか。またどの程度スキルを持っていると思いますか。これらの差が生じる理由をお答えください。

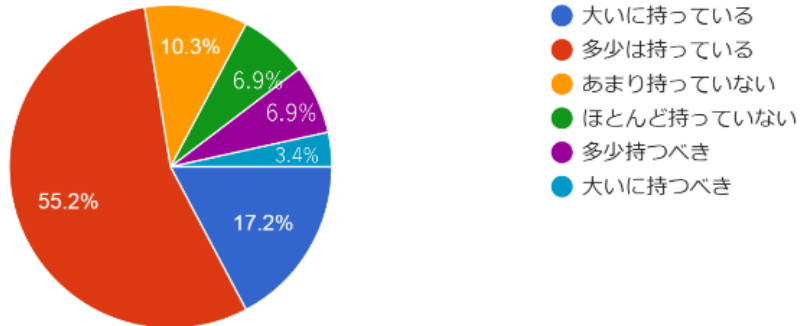
1. 義足使用の意義・目的についての知識について

1) 持つべきか



義足使用の意義・目的についての知識については大いに持つべき（89.7%）、多少持つべき（6.9%）であり、その知識の必要性への肯定的認識率は高く、計 96.6%であった。一方ほとんど持たなくてよいは 3.4%であった。

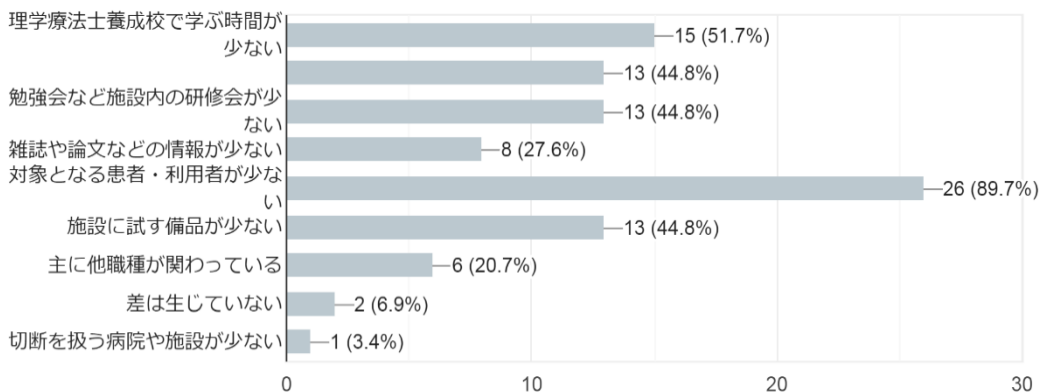
2) 持っているか



義足使用の意義・目的についての知識は大いに持っている（17.2%）、多少は持っている（55.2%）、計 82.4%で知識を持っているとの回答を得て、上記 1) での知識を持つべき（96.6%）と持っている認識率（82.4%）とのギャップ（差）は 14.2pt であった。

一方、あまり持っていない（10.3%）、ほとんど持っていない（6.9%）で計 17%の知識を持っていない回答を得た。また多少持つべき 6.9%、大いに持つべきは 3.4%であった。

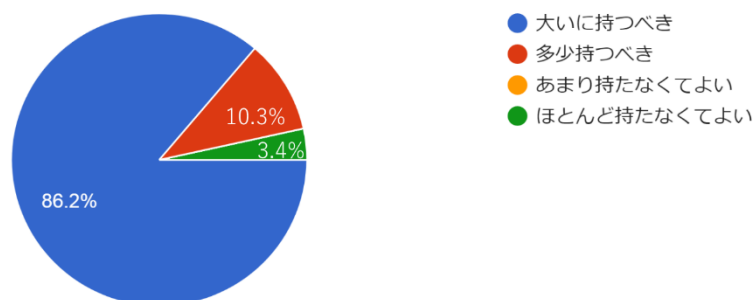
3) 差が生じる理由（複数回答可）



これらの認識のギャップの理由として、対象となる患者・利用者が少ない(89.7%)が最も多かった。続いて理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない(51.7%)が半数ほどであり、協会や県士会など施設外の研修会が少ない、勉強会など施設内の研修会が少ないが（44.8%）、施設に試す備品が少ない（44.8%）と同率であった。

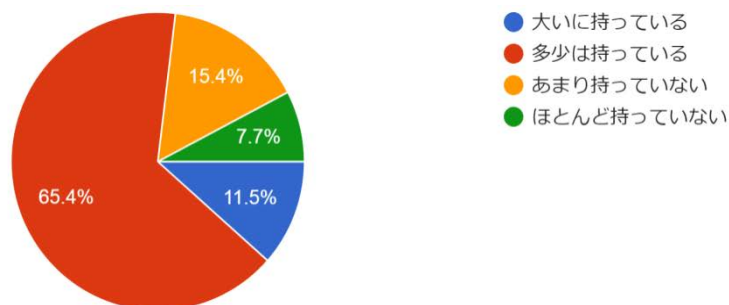
2. 義足の種類（ソケット、継手、足部等）と適応についての知識について

1) 持つべきか



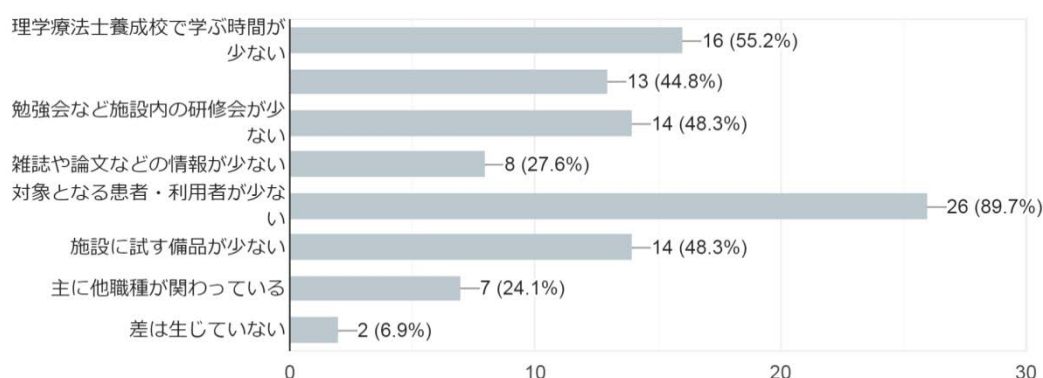
義足の種類（ソケット、継手、足部等）と適応の知識を持つべきかという問いについて、大いに持つべき(86.2%)、多少持つべき(10.3%)を合わせて 96.5%であった。一方、あまり持たなくてよい(0%)、ほとんど持たなくてよい(3.4%)であった。

2) 持っているか



義足の種類（ソケット、継手、足部等）と適応についての知識を持っているかの問いについて、大いに持っている（11.5%）と多少は持っている（65.4%）を合わせて、76.9%が知識を持っている回答を得たが、持つべきかと持っているのギャップは 19.6pt であった。

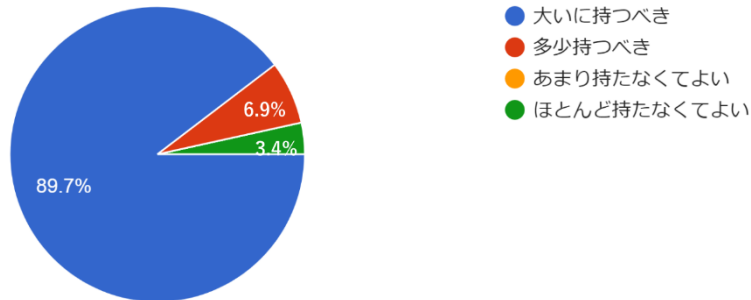
3) 差が生じる理由（複数回答可）



知識は必要と感じながらギャップ（差）を生じた理由は、対象となる患者・利用者が少ないが 89.7%と最も大きい。次に理学療法士養成校で学ぶ時間が少ないが 55.2%、勉強会など施設内の研修会が少ない(48.3%)、施設に試す備品が少ない(48.3%)であった。差を生じていないは 6.9%であった。

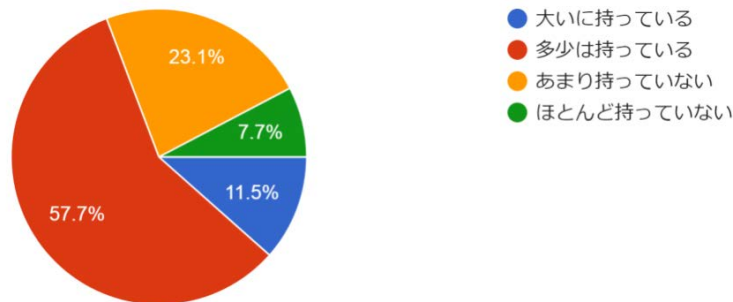
3. 義足の部品（ソケット、継手、足部等）の種類と適応の知識について

1) 持つべきか



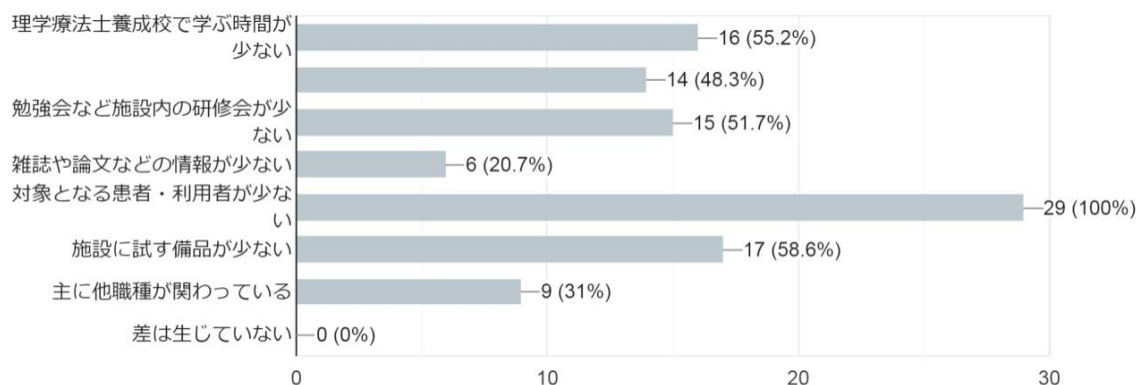
義足の部品（ソケット、継手、足部等）の種類と適応の知識は、大いに持つべき(89.7%)、多少持つべき(6.9%)で合計 96.6%が知識を持つべきとの認識を持っていた。一方、あまり持たなくてよい(0%)、ほとんど持たなくてよい(3.4%)の結果であった。

2) 持っているか



義足の部品（ソケット、継手、足部等）の種類と適応についての知識は大いに持っている（11.5%）、多少は持っている（57.7%）の計 69.2%が知識を持っているとの認識であったが、知識を持つべき認識率（96.6%）と比べて 27.4pt のギャップを認めた。

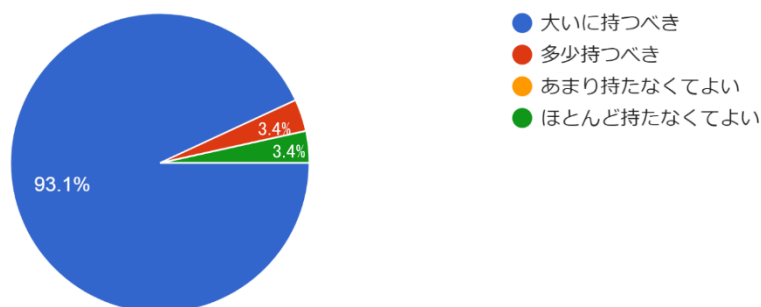
3) 差が生じる理由（複数回答可）



知識は必要と感じながら持ち合わせていないギャップは 27.4pt あった。その理由では、対象となる患者・利用者が少ないが 100%と最も大きい理由であった。次に施設に試す備品が少ない(58.6%)であった。続いて理学療法士養成校で学ぶ時間が少ないが 55.2%、勉強会など施設内の研修会が少ない(48.3%)、差を生じていないは 0%であった。

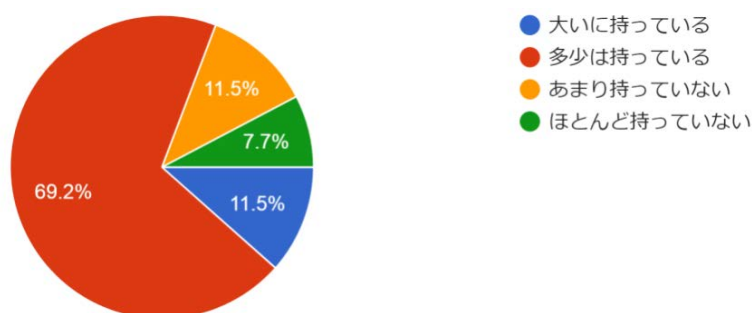
4. 義足の使用に関わる疾患や病態に関する知識について

1) 持つべきか



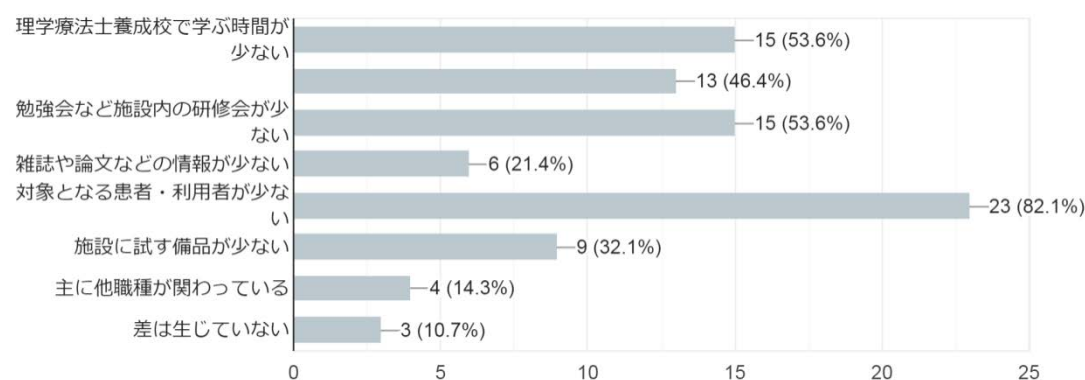
義足の使用に関わる疾患や病態に関する知識についての知識は、大いに持つべき(93.1%)、多少持つべき(3.4%)を合わせて 96.6%で大半が知識を持つべきとの認識を持っていた。

2) 持っているか



義足の使用に関わる疾患や病態に関する知識は大いに持っている(11.5%)、多少は持っている(69.2%)を合わせて 80.7%が知識を持っている現状認識であったが、持つべきと答えた 96.6%の回答と比べると 15.9pt のギャップがあり、知識が必要との認識の差を認めた。

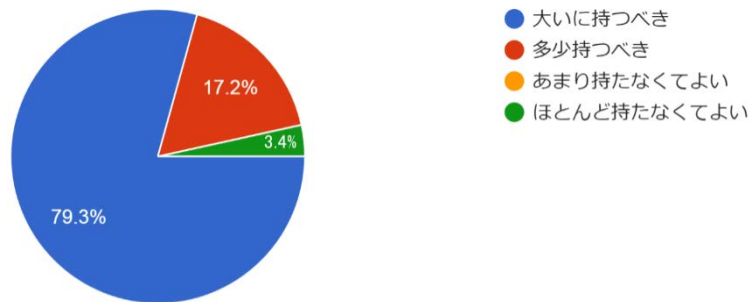
3) 差が生じる理由 (複数回答可)



対象となる患者・利用者が少ない(82.1%)、次に理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない(53.6%)、勉強会など施設内の研修会が少ない(46.4%)の順で前述の知識についての必要認識に対する現状での差(ギャップ)の理由を感じていた。

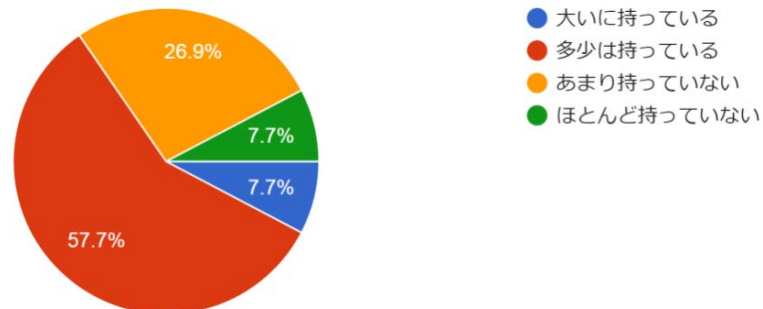
5. 義足の使用に関わる機能解剖学（切断術等）に関する知識について

1) 持つべきか



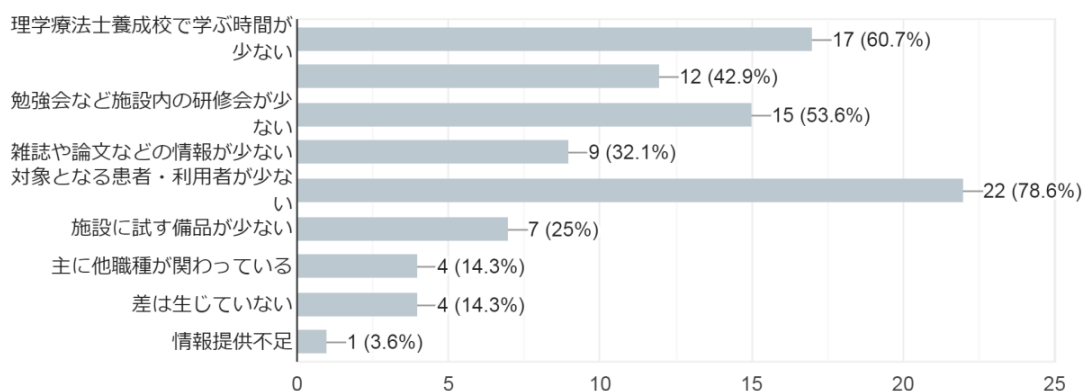
義足の使用に関わる機能解剖学（切断術等）に関する知識については、大いに持つべき(79.3%)、多少持つべき(17.2%)を合わせて 96.6%で大半が知識を持つべきとの認識を持っていた。一方、あまり持たなくてよい(0%)、ほとんど持たなくてよいは 3.4%であった。

2) 持っているか



義足の使用に関わる疾患や病態に関する知識は大いに持っている(7.7%)、多少は持っている(57.7%)を合わせて 65.4%が機能解剖学（切断術等）に関する知識を持っていたが、持つべきと答えた 96.6%の回答と比べると 31.2pt の差があり、必要認識と現状との間にギャップを認めた。

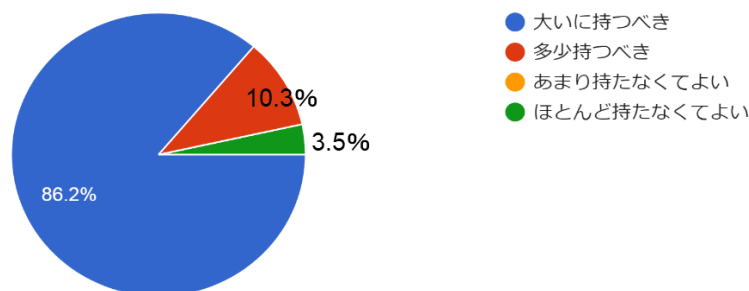
3) 差が生じる理由（複数回答可）



差が生じる理由としては対象となる患者・利用者が少ない(78.6%)、次に理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない(60.7%)、勉強会など施設内の研修会が少ない(53.6%)、必要でありながら現状でのギャップ差の理由を感じていた。

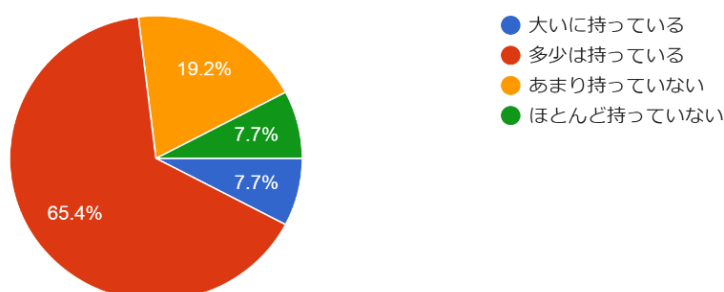
6. 義足の運動学（重心・支持基底面・モーメント等）に関する知識について

1) 持つべきか



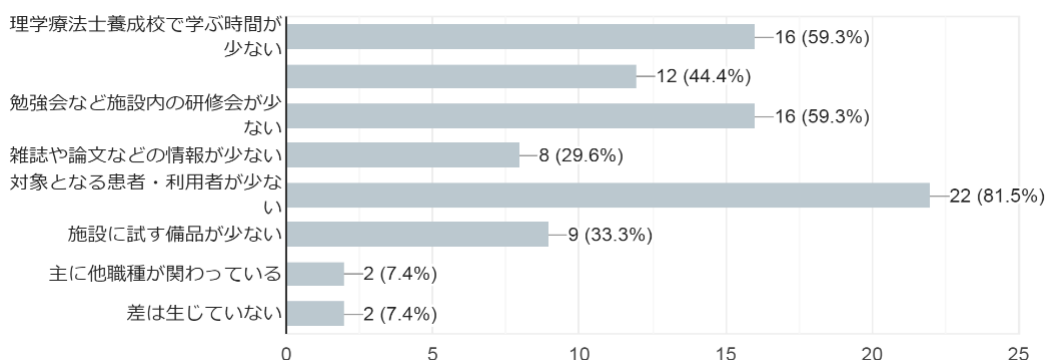
義足の運動学に関する知識を理学療法士がどの程度持つべきかについては、「大いに持つべき」は 86.2%、「多少持つべき」は 10.3%を合計すると 96.5%であり、「ほとんど持たなくてよい」は 3.5%である。

2) 持っているか



義足の運動学に関する知識については、「大いに持っている」は 7.7%、「多少は持っている」は 65.4%で合計した「知識保有数」は、73.1%である。

3) 差が生じる理由（複数回答可）

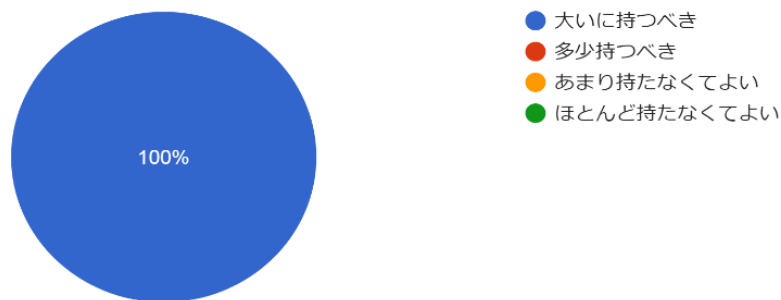


「大いに持つべき知識」と「大いに持っている知識」とのギャップは、78.5pt であり、「持つべき知識」と「持っている知識」とのギャップは、23.4pt である。

義足の運動学の知識において、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で 81.5%である。次いで「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」と「勉強会など施設内の研修会が少ない」が同率で 59.3%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」で 44.4%、「施設に試す備品が少ない」で 33.3%、「雑誌や論文などの情報が少ない」で 29.6%と続く。

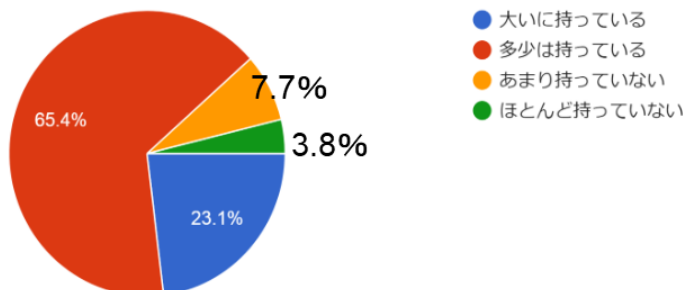
7. 義足歩行の知識について

1) 持つべきか



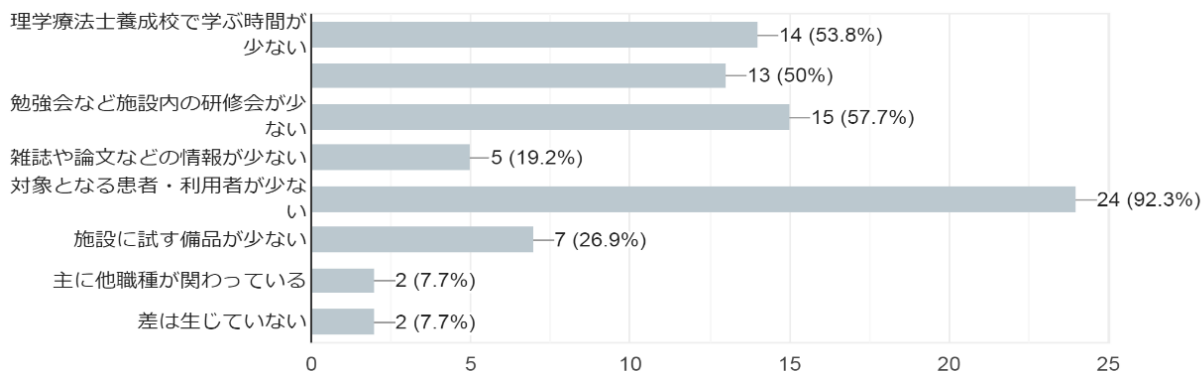
義足歩行に関する知識を理学療法士がどの程度持つべきかについては、「大いに持つべき」は 100.0%である。

2) 持っているか



義足歩行に関する知識については、「大いに持っている」は 23.1%、「多少は持っている」は 65.4%で合計した「知識保有数」は、88.5%である。

3) 差が生じる理由（複数回答可）

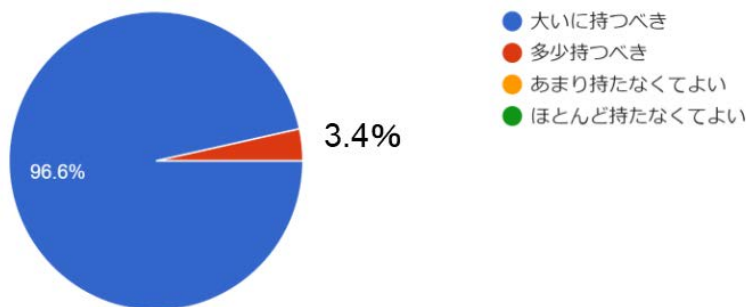


「大いに持つべき知識」と「大いに持っている知識」とのギャップは、**76.9pt** であり、「持つべき知識」と「持っている知識」とのギャップは、**11.5pt** である。

義足歩行の知識において、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で 92.3%である。次いで「勉強会など施設内の研修会が少ない」で 57.7%、「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」で 53.8%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」で 50.0%、「施設に試す備品が少ない」で 26.9%、「雑誌や論文などの情報が少ない」で 19.2%と続く。

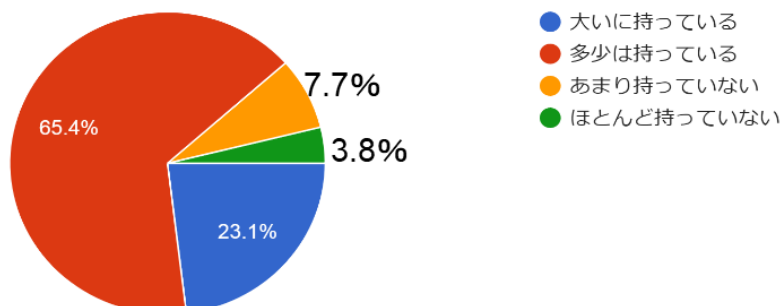
8. 義足の異常歩行の知識について

1) 持つべきか



義足の異常歩行に関する知識を理学療法士がどの程度持つべきかについては、「大いに持つべき」は96.6%、「多少持つべき」は3.4%であり、合計すると100.0%である。

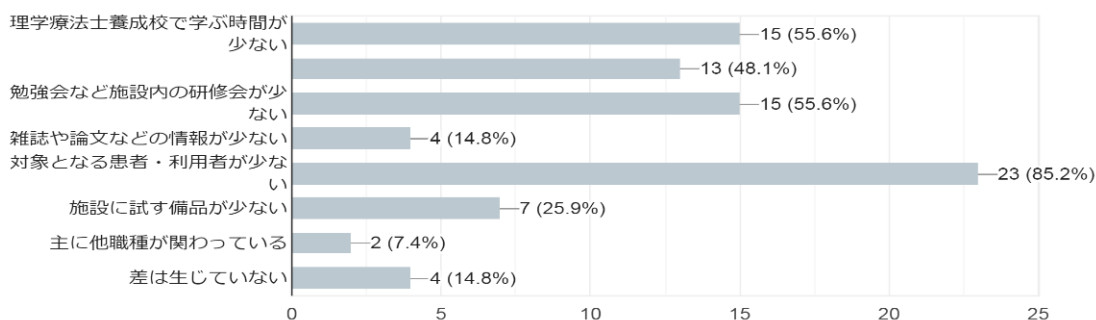
2) 持っているか



義足の異常歩行に関する知識については、「大いに持っている」は23.1%、「多少は持っている」は65.4%で合計した「知識保有数」は、88.5%である。

「大いに持つべき知識」と「大いに持っている知識」とのギャップは、73.5pt であり「持つべき知識」と「持っている知識」とのギャップは、11.5pt である。

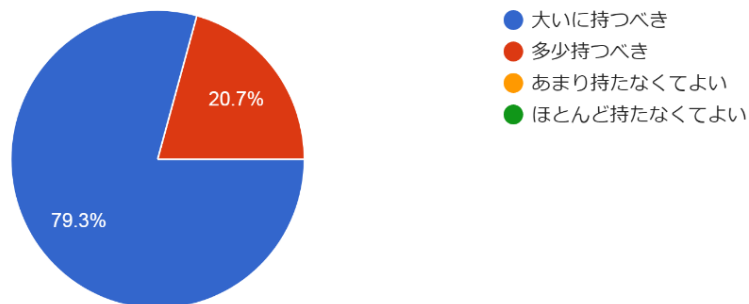
3) 差が生じる理由（複数回答可）



義足の異常歩行の知識において、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で85.2%である。次いで「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」と「勉強会など施設内の研修会が少ない」が同率で55.6%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」で48.1%、「施設に試す備品が少ない」で25.9%、「雑誌や論文などの情報が少ない」で14.8%と続く。

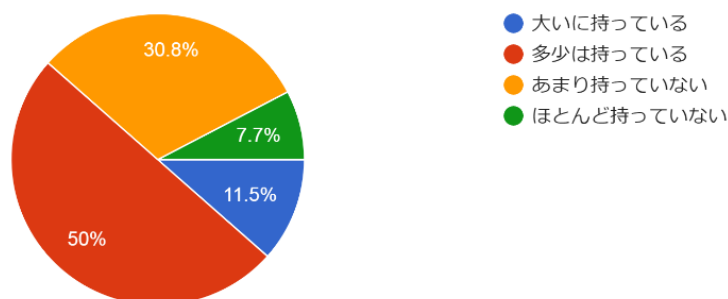
9. 義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力について

1) 持つべきか



義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力を理学療法士がどの程度持つべきかについては、「大いに持つべき」は79.3%、「多少持つべき」は20.7%であり、合計すると100.0%である。

2) 持っているか

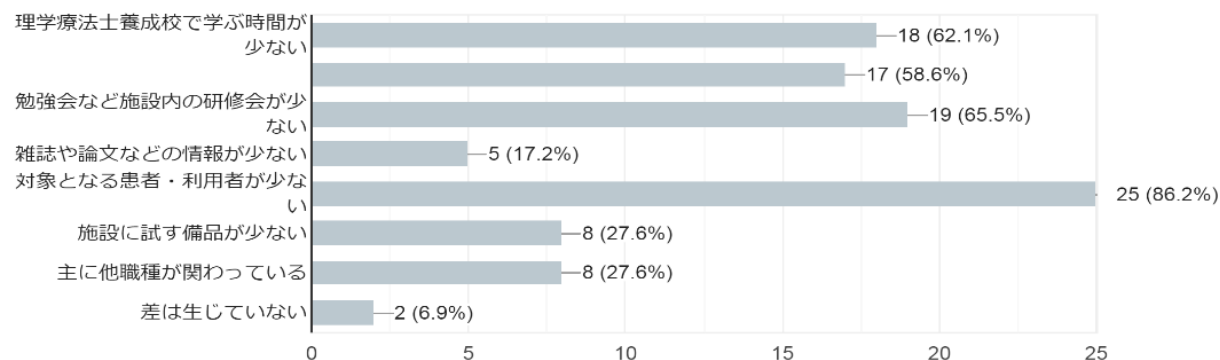


義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力については、「大いに持っている」は11.5%、「多少は持っている」は50.0%で合計した「能力保有数」は、61.5%である。

<理想と実際のギャップ>

「大いに持つべき能力」と「大いに持っている能力」とのギャップは、67.8pt であり「持つべき能力」と「持っている能力」とのギャップは、38.5pt である。

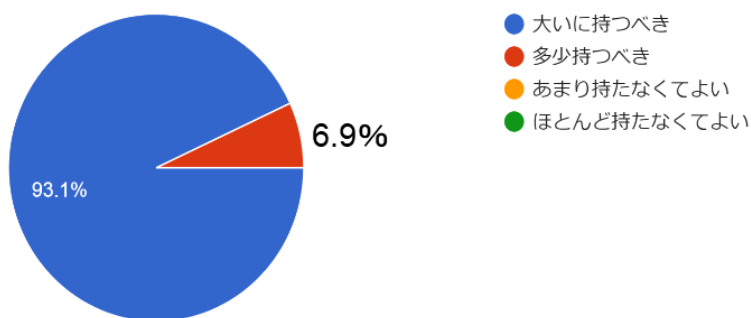
3) 差が生じる理由（複数回答可）



義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力において、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で86.2%である。次いで「勉強会など施設内の研修会が少ない」で65.5%、「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」で62.1%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」で58.6%、「施設に試す備品が少ない」と「主に他職種が関わっている」が同率で27.6%、「雑誌や論文などの情報が少ない」で17.2%と続く。

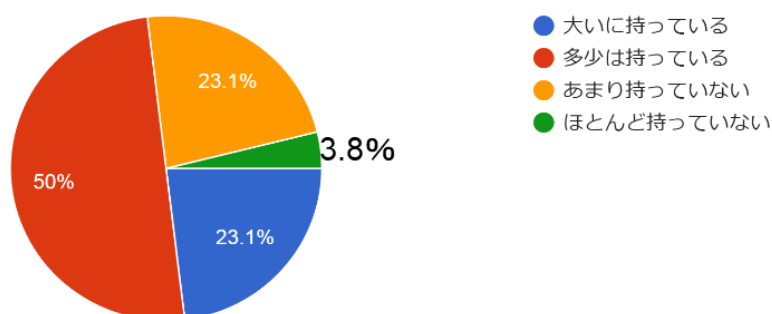
10. 義足を活用した歩行練習の技術について

1) 持つべきか



義足を活用した歩行練習の技術を理学療法士がどの程度持つべきかについては、「大いに持つべき」は93.1%、「多少持つべき」は6.9%であり、合計すると100.0%である。

2) 持っているか

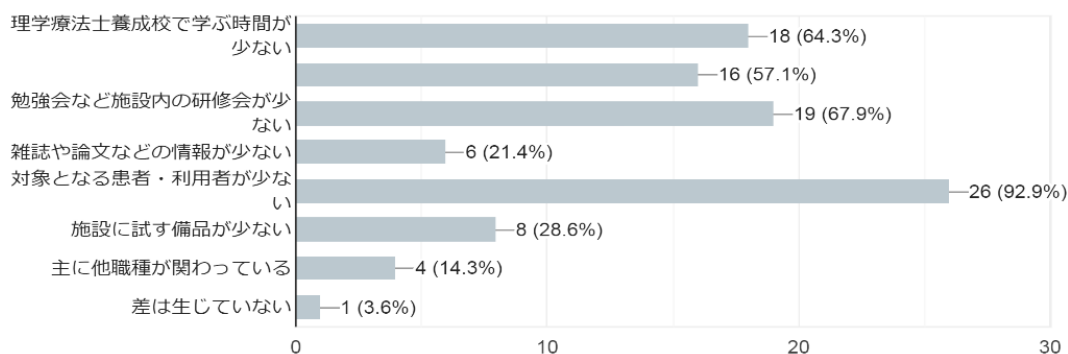


義足を活用した歩行練習の技術については、「大いに持っている」は23.1%、「多少は持っている」は50.0%で合計した「技術保有数」は、73.1%である。

<理想と実際のギャップ>

「大いに持つべき技術」と「大いに持っている技術」とのギャップは、70.0pt であり「持つべき技術」と「持っている技術」とのギャップは、26.9pt である。

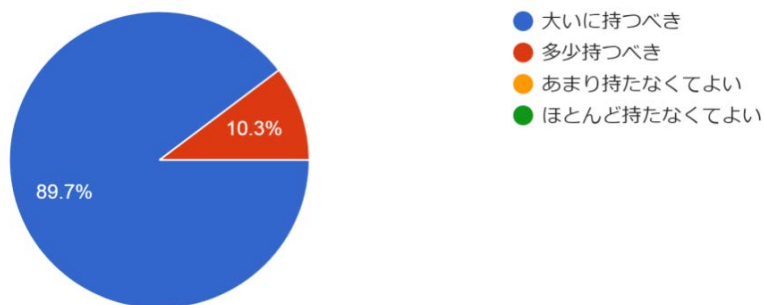
3) 差が生じる理由（複数回答可）



義足を活用した歩行練習の技術において、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で92.9%である。次いで「勉強会など施設内の研修会が少ない」で67.9%、「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」で64.3%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」が57.1%、「施設に試す備品が少ない」で28.6%、「雑誌や論文などの情報が少ない」で21.4%、「主に他職種が関わっている」で14.3%と続く。

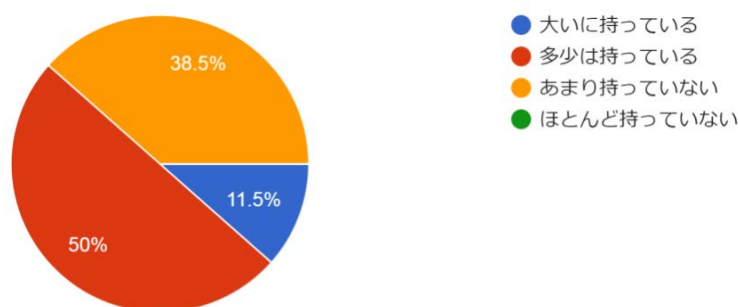
1 1. 義足の使用可否についての評価能力について

1) 持つべきか



義足使用可否についての評価能力については「大いに持つべき」は 89.7% 「多少持つべき」が 10.3% であり、合計すると 100. 0%であった。

2) 持っているか

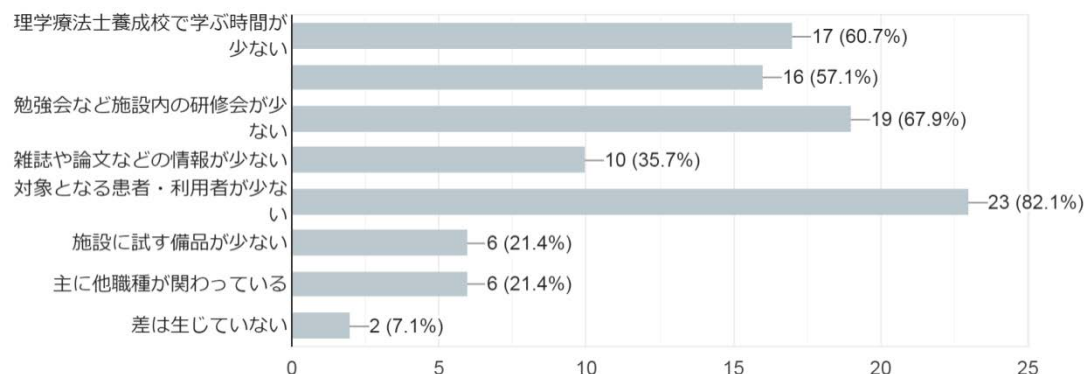


義足使用可否についての評価能力に関する自己評価では「多いに持っている」が 11.5% 「多少は持っている」が 50%で合計した「知識保有数」は 61.5%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき能力」と「大いに持っている能力」のギャップは 78.2p であり、「もつべき能力」と「持っている能力」のギャップは、ほぼない。

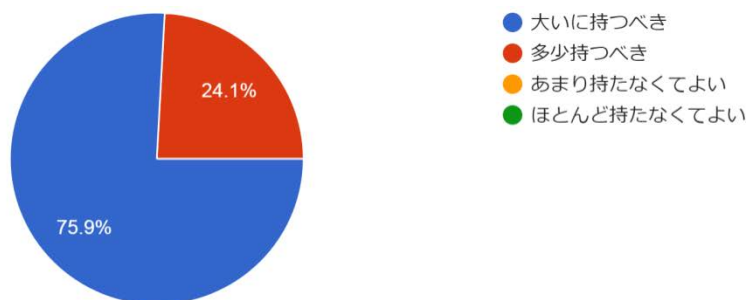
3) 差が生じる理由（複数回答可）



義足使用の可否を判断する評価能力について、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは「対象となる患者・利用者が少ない」で、82.1% 1 である。ついで「勉強会など施設内の研修会が少ない」で 67.9%、「養成校で学ぶ時間が少ない」が 60.7%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」が 58.6%と続く。一方、差が生じていないとする評価は 7.1%と低値である。

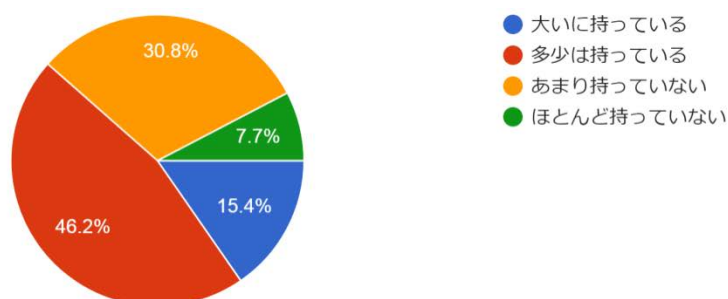
1 2. 義足の破損、不適合に関する知識について

1) 持つべきか



義足の破損、不適合についての評価能力については「大いに持つべき」は 75.9% 「多少持つべき」が 24.1%であり、合計すると 100.0%であった。

2) 持っているか

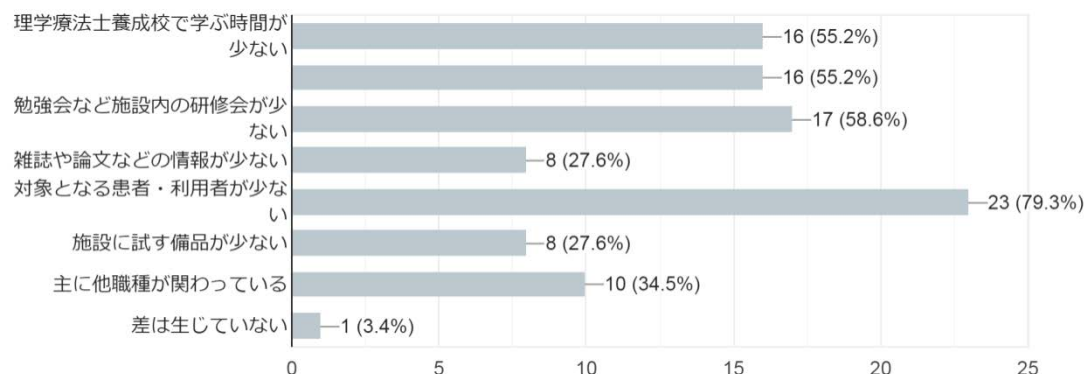


義足の破損、不適合についての評価能力に関する自己評価では「多いに持っている」が 15.4% 「多少は持っている」が 46.2%で、合計した「知識保有数」は 61.6%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき能力」と「大いに持っている能力」のギャップは 60.5p であり、「もつべき能力」と「持っている能力」のギャップは 22.1p である。

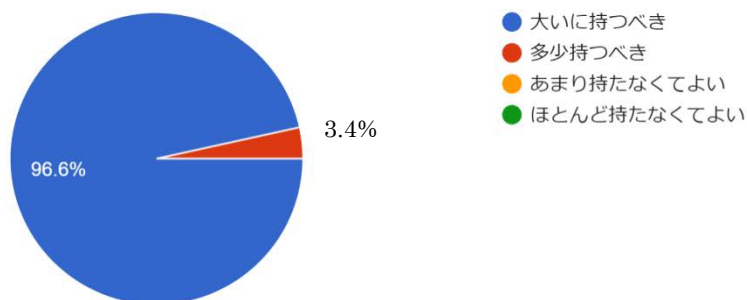
3) 差が生じる理由 (複数回答可)



義足の破損・不適合を判断する評価能力について、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは「対象となる患者・利用者が少ない」で、79.3%である。ついで「勉強会など施設内の研修会が少ない」で 58.6%、「養成校で学ぶ時間が少ない」が 55.2%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」が 55.2%という近似値で並ぶ。一方、差が生じていないとする評価は 3.4%と低値である。

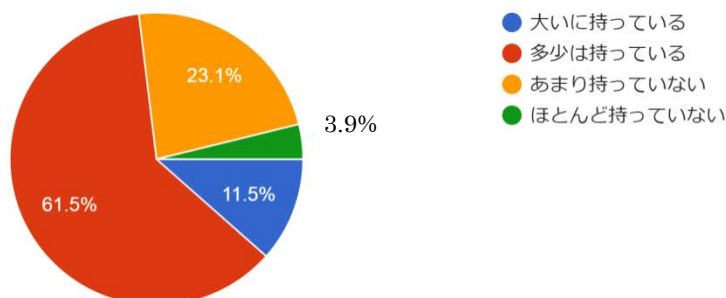
13. 義足使用による断端や足部の創傷と対応についての知識について

1) 持つべきか



義足使用による断端や足部の創傷と対応についての知識については「大いに持つべき」は 96.6% 「多少持つべき」が 3.4%であり、合計すると 100.0%であった。

2) 持っているか

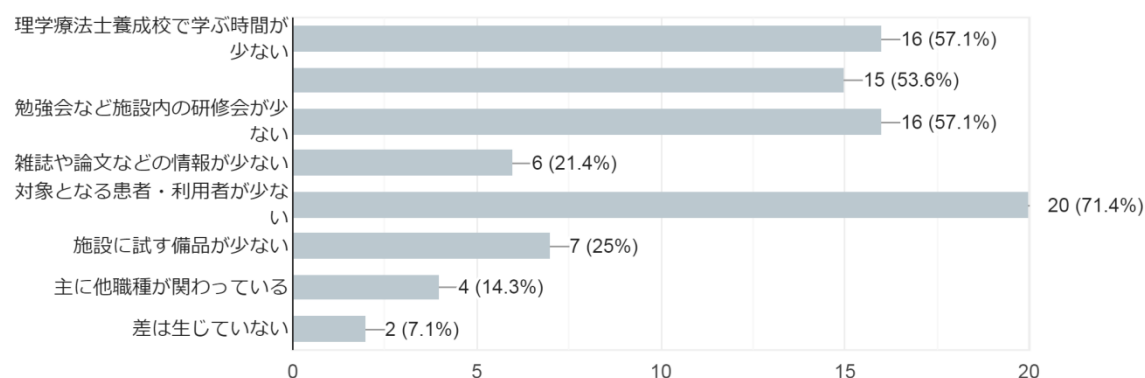


断端や足部の創傷と対応についての知識について、「大いに持っている」が 11.5% 「多少は持っている」が 61.5%で、合計した「知識保有数」は 73%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき能力」と「大いに持っている能力」のギャップは 85.1p であり、「多少もつべき能力」と「多少は持っている能力」のギャップは 58.1p である。

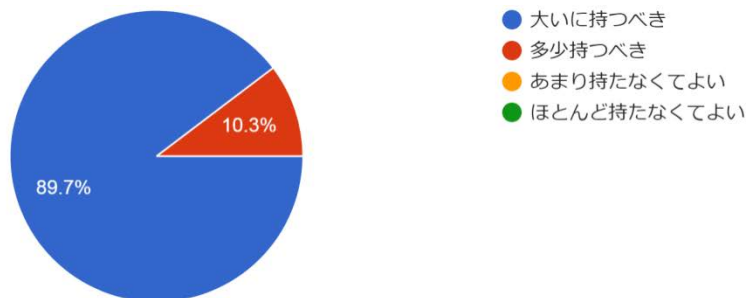
3) 差が生じる理由（複数回答可）



断端や足部の創傷と対応についての知識について理想と実際のギャップの理由で最も多いのは「対象となる患者・利用者が少ない」で、71.4%である。ついで「勉強会など施設内の研修会が少ない」と「養成校で学ぶ時間が少ない」が 57.1%で同値、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」が 53.6%という近似値で並ぶ。一方、差が生じていないとする評価は 7.1%と低値である

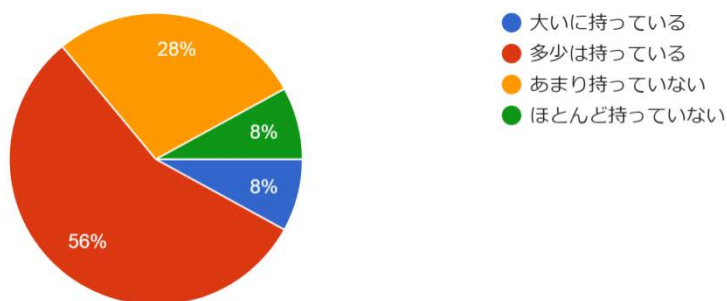
14. 義足ソケットの汚れや除菌など衛生管理についての知識について

1) 持つべきか



義足ソケットの汚れや除菌など衛生管理についての知識については「大いに持つべき」は 89.7% 「多少持つべき」が 10.3%であり、合計すると 100.0%であった。

2) 持っているか

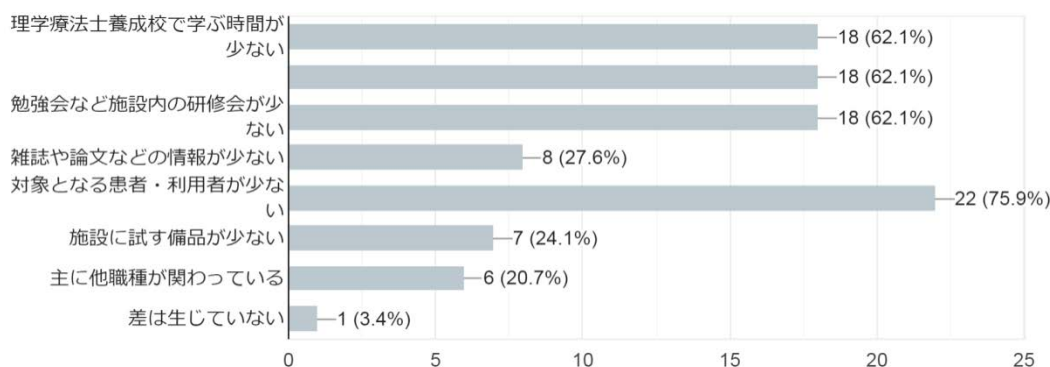


義足ソケットの汚れや除菌など衛生管理についての知識については「大いに持っている」が 8% 「多少は持っている」が 56%で、合計した「知識保有数」は 64%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき能力」と「大いに持っている能力」のギャップは 81.7p であり、「多少もつべき能力」と「多少は持っている能力」のギャップは 45.7p である。

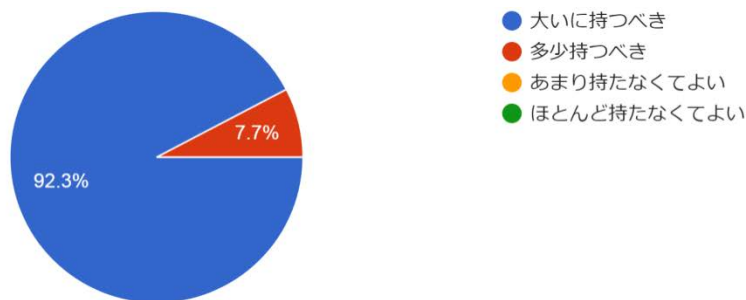
3) 差が生じる理由 (複数回答可)



義足ソケットの汚れや除菌など衛生管理についての知識については理想と実際のギャップの理由で最も多いのは「対象となる患者・利用者が少ない」で、75.9%である。ついで「勉強会など施設内の研修会が少ない」「養成校で学ぶ時間が少ない」「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」が 62.1%という同値で並ぶ。一方、差が生じていないとする評価は 3.4%と低値である。

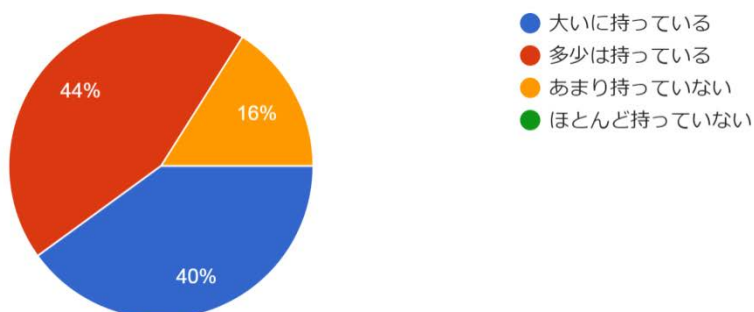
15. 義足着脱方法に関する知識について

1) 持つべきか



義足着脱方法に関する知識は「大いに持つべき」は92.3% 「多少持つべき」が7.7%であり、合計すると100.0%であった。

2) 持っているか

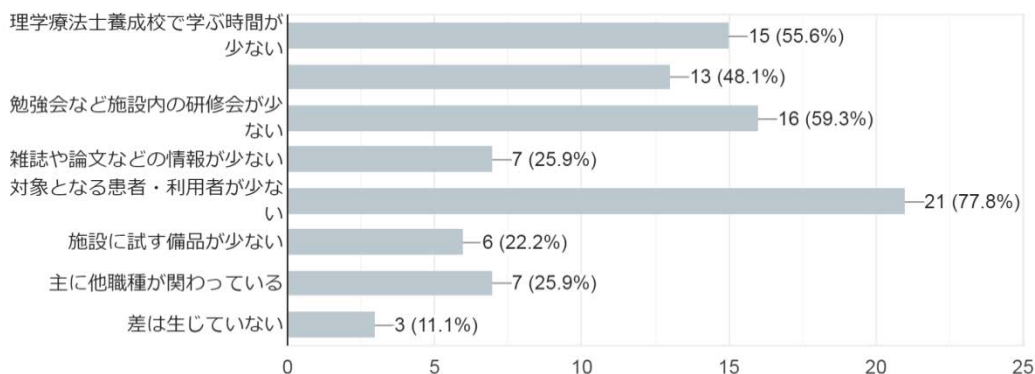


義足着脱方法に関する知識は「多いに持っている」が40% 「多少は持っている」が44%で、合計した「知識保有数」は84%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき能力」と「大いに持っている能力」のギャップは52.3pであり、「多少もつべき能力」と「多少は持っている能力」のギャップは36.3pである。

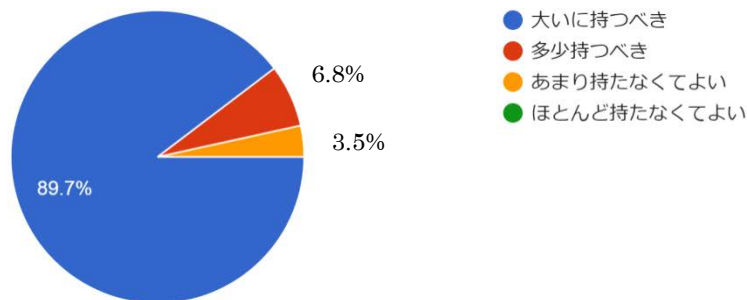
3) 差が生じる理由(複数回答可)



義足着脱方法に関する知識については、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは「対象となる患者・利用者が少ない」で、79.2%である。ついで「勉強会など施設内の研修会が少ない」「養成校で学ぶ時間が少ない」「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」が54.2%という同値で並ぶ。一方、差が生じていないとする評価は12.5%と低値である。

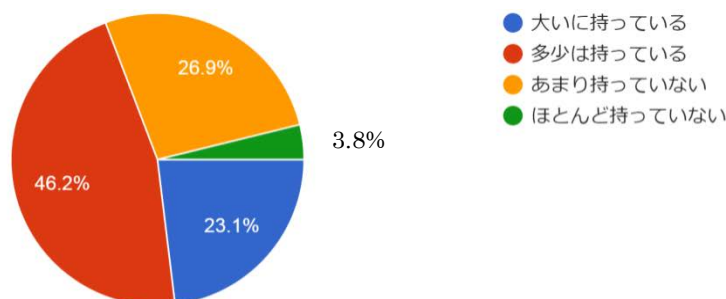
16. 義足を生活関連動作（移乗動作、入浴動作等）に活用する知識について

1) 持つべきか



義足を生活関連動作（移乗動作、入浴動作等）に活用する知識について「大いに持つべき」は 89.7%、「多少持つべき」は 6.8%を合計すると 96.5%であり、「ほとんど持たなくてよい」は 0%であった。

2) 持っているか

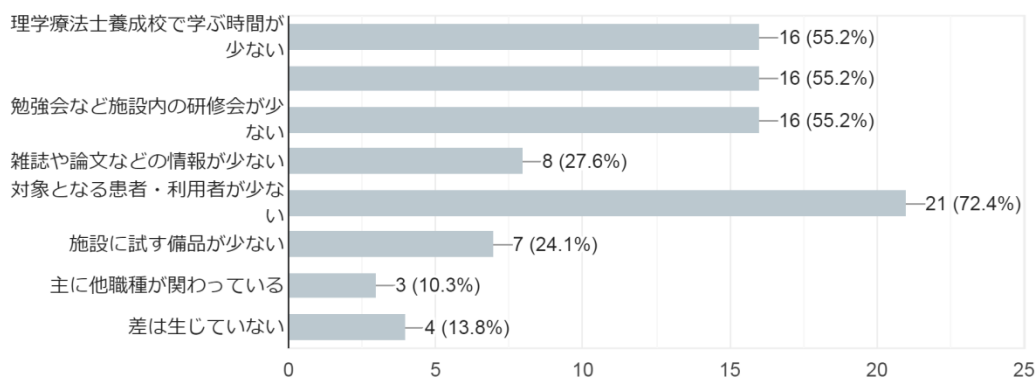


義足を生活関連動作（移乗動作、入浴動作等）に活用する知識について「大いに持っている」 23.1%、「多少は持っている」は 46.2%で合計した「知識保有数」は、69.3%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき知識」と「大いに持っている知識」とのギャップは、66.6pt であり、「持つべき知識」と「持っている知識」とのギャップは、41.4pt である。

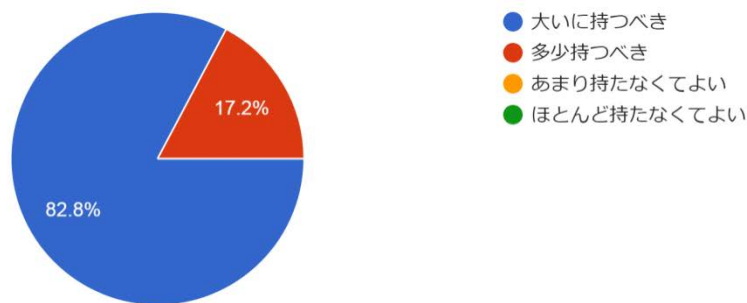
3) 差が生じる理由（複数回答可）



義足を生活関連動作（移乗動作、入浴動作等）に活用する知識について、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で 72.4%である。次いで「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」と「勉強会など施設内の研修会が少ない」と「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」が同率で 55.2%、「雑誌や論文などの情報が少ない」 27.6%、「施設に試す備品が少ない」で 24.1%、と続く。

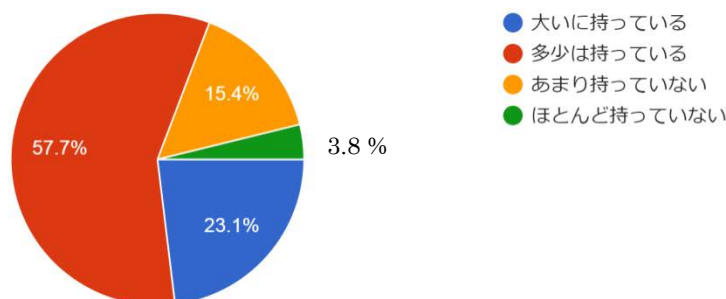
17. 義足の使用に関して切断者本人や家族に説明する能力について

1) 持つべきか



義足の使用に関して切断者本人や家族に説明する能力について「大いに持つべき」は82.8%、「多少持つべき」は17.2%で合計すると100%であり、「あまり持たなくてよい」「ほとんど持たなくてよい」は0%である。

2) 持っているか

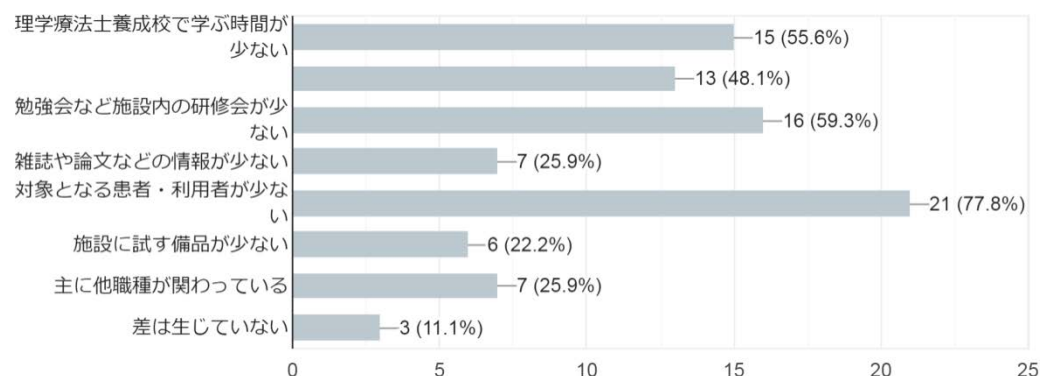


義足の使用に関して切断者本人や家族に説明する能力について「大いに持っている」23.1%、「多少は持っている」は57.7%で合計した「知識保有数」は、80.8%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき知識」と「大いに持っている知識」とのギャップは、59.7ptであり、「持つべき知識」と「持っている知識」とのギャップは、40.5ptである。

3) 差が生じる理由（複数回答可）

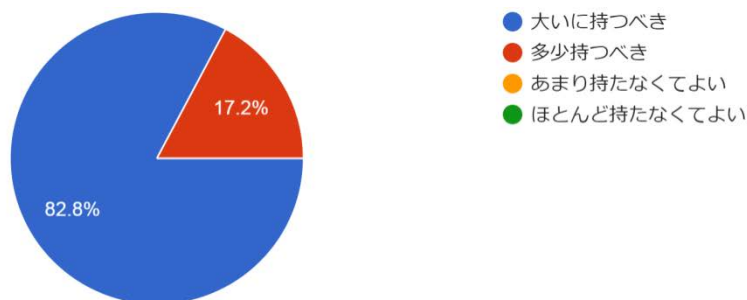


義足の使用に関して切断者本人や家族に説明する能力について、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で77.8%である。次いで「勉強会など施設内の研修会が少ない」59.3%、次いで「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」55.6%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」48.1%、「雑誌や論文などの情報が少ない」25.9%と「主に他職種が関わっている」25.9%、「施設に試す備品が少ない」22.2%と続く。

18. 義足の使用に関して他職種に説明する能力について

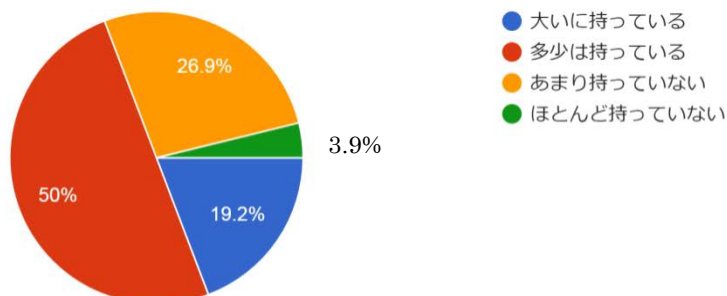
1) 持つべきか

義足の使用に関して他職種（医師、義肢装具士、ケアマネージャ等）に説明する能力について「大い



に持つべき」は 82.8%、「多少持つべき」は 17.2% で合計すると 100% であり、「あまり持たなくてよい」「ほとんど持たなくてよい」は 0% である。

2) 持っているか

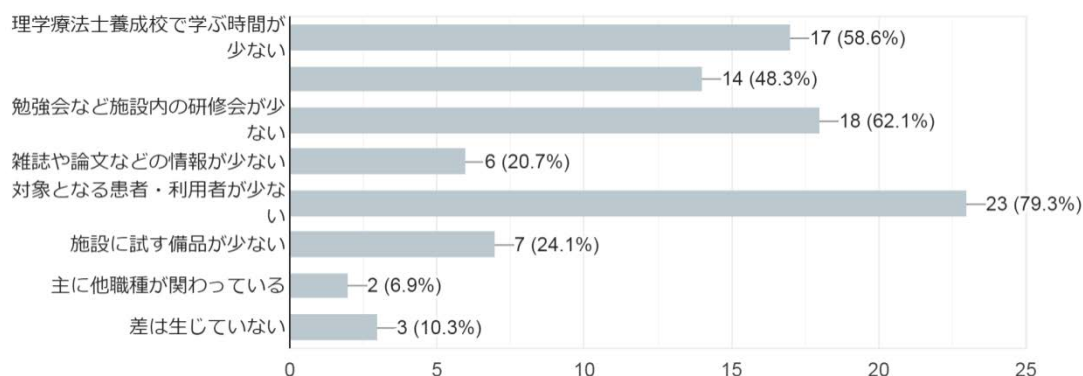


義足の使用に関して他職種に説明する能力について、「大いに持っている」19.2%、「多少は持っている」は 50% で合計した「知識保有率」は、69.2% である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき知識」と「大いに持っている知識」とのギャップは、68.5pt であり、「持つべき知識」と「持っている知識」とのギャップは、10.5pt である。

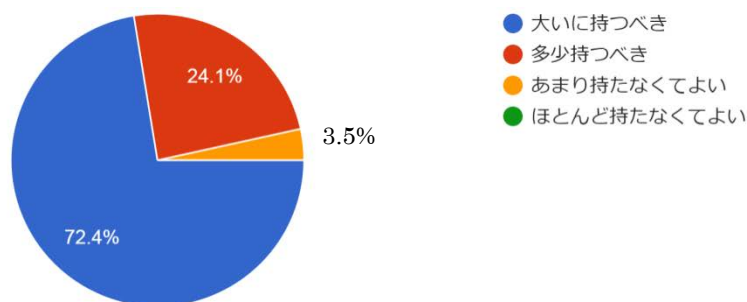
3) 差が生じる理由（複数回答可）



義足作製・修理に関する制度（社会保険制度・障害者総合支援法等）の知識について、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で 65.5% である。次いで「勉強会など施設内の研修会が少ない」と「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」が同率で 55.2%、次いで「主に他職種が関わっている」が 51.7%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」48.3%「施設に試す備品が少ない」17.2%「雑誌や論文などの情報が少ない」10.3%、と続く。

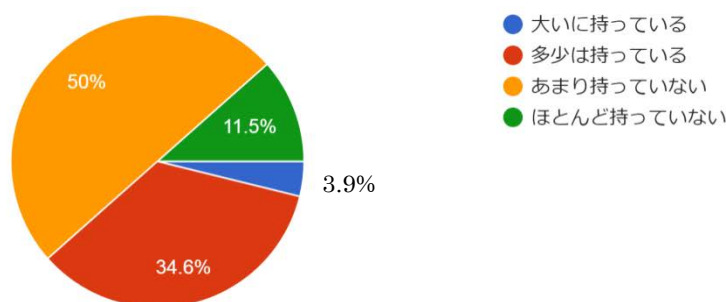
19. 義足作製・修理に関する制度の知識について

1) 持つべきか



義足作製・修理に関する制度（社会保険制度・障害者総合支援法等）の知識について「大いに持つべき」は72.4%「多少持つべき」は24.1%で合計すると96.5%である

2) 持っているか

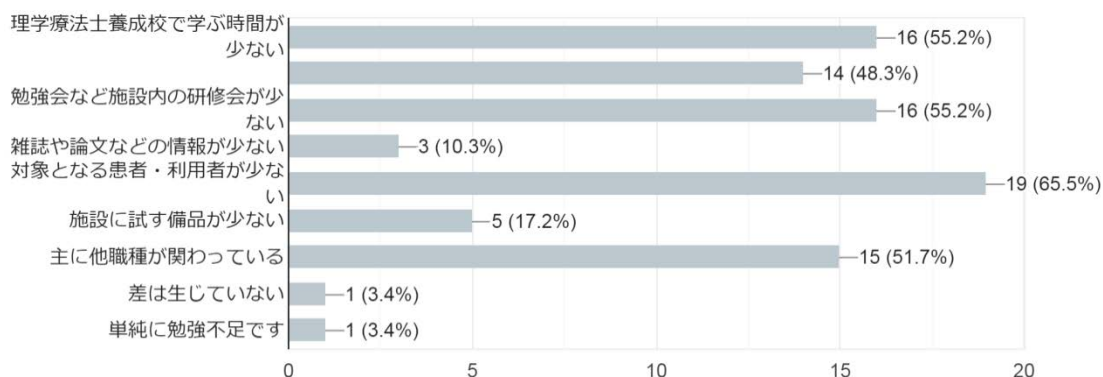


義足作製・修理に関する制度（社会保険制度・障害者総合支援法等）の知識について「大いに持っている」3.9%、「多少は持っている」は34.6%で合計した「知識保有数」は、38.5%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき知識」と「大いに持っている知識」とのギャップは、68.5ptであり、「持つべき知識」と「持っている知識」とのギャップは、10.5ptである。

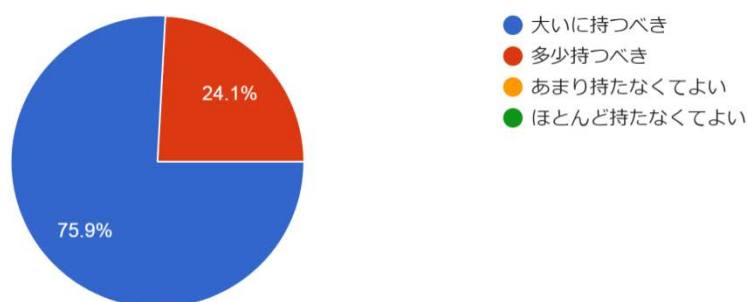
3) 差が生じる理由（複数回答可）



義足作製・修理に関する制度（社会保険制度・障害者総合支援法等）の知識について、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で65.5%である。次いで「勉強会など施設内の研修会が少ない」と「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」が同率で55.2%、次いで「主に他職種が関わっている」が51.7%、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」48.3%「施設に試す備品が少ない」17.2%「雑誌や論文などの情報が少ない」10.3%と続く。

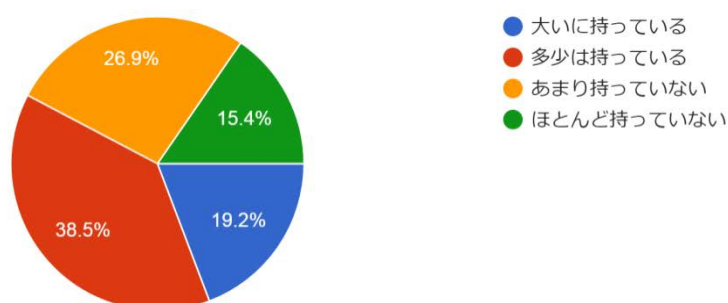
20. 義足に関する相談先についての知識について

1) 持つべきか



義足に関する相談先についての知識について「大いに持つべき」は75.9%、「多少持つべき」は24.1%で合計すると96.5%である。

2) 持っているか

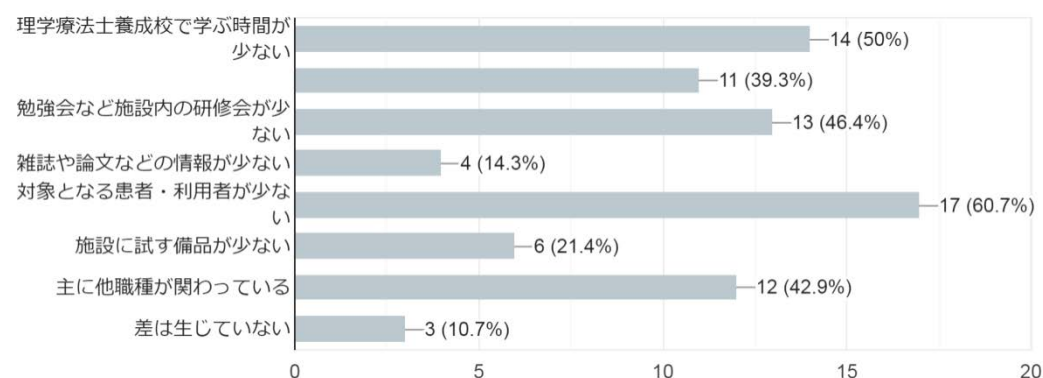


義足に関する相談先についての知識について「大いに持っている」19.2%、「多少は持っている」は38.5%で合計した「知識保有数」は、57.7%である。

<理想と現実のギャップ>

「大いに持つべき知識」と「大いに持っている知識」とのギャップは、56.7ptであり、「持つべき知識」と「持っている知識」とのギャップは、14.4ptである。

3) 差が生じる理由（複数回答可）



義足に関する相談先についての知識について、理想と実際のギャップの理由で最も多いのは、「対象となる患者・利用者が少ない」で60.7%である。次いで「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」が50%で「勉強会など施設内の研修会が少ない」が46.4%、次いで「主に他職種が関わっている」が42.9%、「協会や県土会など施設外の研修会が少ない」39.3%「施設に試す備品が少ない」21.4%「雑誌や論文などの情報が少ない」14.3%と続く。

第3章 結果のまとめ (クロス集計結果と考察)

クロス集計 (横順位別)

横順位別 → 1位 2位 3位 	n=	理学療法士 養成校で学 ぶ時間が少 ない	協会や県士 会など施設 外の研修会 が少ない	勉強会など 施設内の研 修会が少な い	雑誌や論文 などの情報 が少ない	対象となる患 者・利用者が 少ない	施設に試す 備品が少な い	主に他職種 が関わってい る	差は生じて いない
義足使用の意義・目的についての知識	29	51.7	44.8	44.8	27.6	89.7	44.8	6.9	6.9
義足の種類(ソケット、継手、足部等)と適応についての知識	29	55.2	44.8	48.3	27.6	89.7	48.3	24.1	6.9
義足の部品(ソケット、継手、足部等)の種類と適応の知識	29	55.2	48.3	51.7	20.7	100	58.6	31	0
義足の使用に関わる疾患や病態に関する知識	29	53.6	46.4	53.6	21.4	82.1	32.1	14.3	10.7
義足の使用に関わる機能解剖学(切断術等)に関する知識	29	60.7	42.9	53.6	32.1	78.6	25	14.3	14.3
義足の運動学(重心・支持基底面・モーメント等)に関する知識	27	59.3	44.4	59.3	29.6	81.5	33.3	7.4	7.4
義足歩行の知識	26	53.8	50.0	57.7	19.2	92.3	26.9	7.7	7.7
義足の異常歩行の知識	27	55.6	48.1	55.6	14.8	85.2	25.9	7.4	14.8
義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力	29	62.1	58.6	65.5	17.2	86.2	27.6	27.6	6.9
義足を活用した歩行練習の技術	28	64.3	57.1	67.9	21.4	92.9	28.6	14.3	3.6
義足の必要性を判断する能力	28	60.7	57.1	67.9	35.7	82.1	21.4	21.4	7.1
義足の破損や不適合の知識	29	55.2	55.2	58.6	27.6	79.3	27.6	34.5	3.4
義足使用による断端や足部の創傷と対応する能力	28	57.1	53.6	57.1	21.4	71.4	25	14.3	7.1
ソケットの汚れや除菌など衛生管理の知識	29	62.1	62.1	62.1	27.6	75.9	24.1	20.7	3.4
義足の脱着方法の知識	26	55.6	48.1	59.3	25.9	77.8	22.2	25.9	11.1
義足の生活関連動作活用の知識	27	55.2	55.2	55.2	27.6	72.4	24.1	10.3	13.8
義足の使用に関して患者や家族に説明する能力	26	55.6	48.1	59.3	25.9	77.8	22.2	25.9	11.1
義足の使用に関して他職種に説明する能力	27	58.6	48.3	62.1	20.7	79.3	24.1	6.9	10.8
義足作製・修理に関する制度の知識	29	55.2	48.3	55.2	10.3	65.5	17.2	51.7	3.4
義足に関する相談先の知識	28	50	39.3	46.4	14.3	60.7	21.4	42.9	10.7

横順位別ではすべての質問項目でほぼ同じ傾向が見られた。第1位は「対象者、利用者が少ない」すべての項目で1位であり圧倒的に高い数字を示していた。第2位は「施設内研修会が少ない」、第3位は「養成校で学ぶ時間が少ない」であった。第1位の「対象者、利用者が少ない」は施設内で占める下肢切断者の数が他の疾患よりも圧倒的に少ないことが予想され、脳卒中片麻痺患者や変形性膝関節症などと比較すると下肢切断者の占める割合が少ないためと考えられる。第2位と第3位に関しては卒前、卒後の情報不足を示すものであり、現在の卒前教育が臨床でのニーズに伴っていないと考えられ、さらに臨床現場で必要な知識、技術などの情報が手に入りづらい現状がうかがわれる。

クロス集計（縦順位別）

縦順位別 ↓ 1位 2位 3位	n=	理学療法士 養成校で学 ぶ時間が少 ない	協会や県士 会など施設 外の研修会 が少ない	勉強会など 施設内の研 修会が少な い	雑誌や論文 などの情報 が少ない	対象となる患 者・利用者が 少ない	施設に試す 備品が少な い	主に他職種 が関わってい る	差は生じて いない
義足使用の意義・目的についての知識	29	51.7	44.8	44.8	27.6	89.7	44.8	6.9	6.9
義足の種類(ソケット、継手、足部等)と適応についての知識	29	55.2	44.8	48.3	27.6	89.7	48.3	24.1	6.9
義足の部品(ソケット、継手、足部等)の種類と適応の知識	29	55.2	48.3	51.7	20.7	100	58.6	31	0
義足の使用に関わる疾患や病態に関する知識	29	53.6	46.4	53.6	21.4	82.1	32.1	14.3	10.7
義足の使用に関わる機能解剖学(切断術等)に関する知識	29	60.7	42.9	53.6	32.1	78.6	25	14.3	14.3
義足の運動学(重心・支持基底面・モーメント等)に関する知識	27	59.3	44.4	59.3	29.6	81.5	33.3	7.4	7.4
義足歩行の知識	26	53.8	50.0	57.7	19.2	92.3	26.9	7.7	7.7
義足の異常歩行の知識	27	55.6	48.1	55.6	14.8	85.2	25.9	7.4	14.8
義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力	29	62.1	58.6	65.5	17.2	86.2	27.6	27.6	6.9
義足を活用した歩行練習の技術	28	64.3	57.1	67.9	21.4	92.9	28.6	14.3	3.6
義足の必要性を判断する能力	28	60.7	57.1	67.9	35.7	82.1	21.4	21.4	7.1
義足の破損や不適合の知識	29	55.2	55.2	58.6	27.6	79.3	27.6	34.5	3.4
義足使用による断端や足部の創傷と対応する能力	28	57.1	53.6	57.1	21.4	71.4	25	14.3	7.1
ソケットの汚れや除菌など衛生管理の知識	29	62.1	62.1	62.1	27.6	75.9	24.1	20.7	3.4
義足の脱着方法の知識	26	55.6	48.1	59.3	25.9	77.8	22.2	25.9	11.1
義足の生活関連動作活用の知識	27	55.2	55.2	55.2	27.6	72.4	24.1	10.3	13.8
義足の使用に関して患者や家族に説明する能力	26	55.6	48.1	59.3	25.9	77.8	22.2	25.9	11.1
義足の使用に関して他職種に説明する能力	27	58.6	48.3	62.1	20.7	79.3	24.1	6.9	10.8
義足作製・修理に関する制度の知識	29	55.2	48.3	55.2	10.3	65.5	17.2	51.7	3.4
義足に関する相談先の知識	28	50	39.3	46.4	14.3	60.7	21.4	42.9	10.7

縦順位別では「義足を活用した歩行練習の技術」「義足の選択や部品調整時における歩行を評価する能力」「義足の必要性を判断する能力」「ソケットの汚れや除菌など衛生管理の知識」に問題点を感じている結果となった。特に義足歩行に関するニーズが高く、具体的な歩行練習の方法や歩行分析のポイントなどに問題点を感じていると考えられる。切断後に義足歩行が可能になるかの判断で車いすレンタルと義足作成の選択を迫られる場面も少なくないと考えられる。近年、下腿切断はもとより大腿切断もライナーを利用することが多く、断端ケアやライナー洗浄などの患者教育が十分できていない現状も考えられる。

以下に各項目の中で特徴的な部分について記す。

調査項目Ⅱ以降の設問は理学療法士が義足支援を行う上で必要な義足に関する知識、技術、能力などのスキルにどのような認識を持ちながら、その実態はどの程度のスキルを持ち合わせているのか、そしてそのギャップとの関連について分析検討を行った。

義足使用の意義・目的については知識を「持つべき」と「持っている」とのギャップは14.2ptであった。また義足の種類と適応についての知識と「持つべき」と「持っている」とのギャップは19.6ptであったが、義足の使用に関わる疾患や病態に関する知識、義足の使用に関わる機能解剖学（切断術等）に関する知識については96.6%が必要との認識があり、その実態のギャップは15.9～17.2ptであった。

一方、義足の部品の種類と適応についてのギャップは27.4ptであり、これは理学療法士にとって比較的必要とされる知識であると考えられる。

義足の運動学、歩行について義足歩行、義足の異常歩行の知識については、対象者のおおよそ100%が持つべきと回答している。この要因としては、理学療法士にとって「運動学」や「歩行」に関することは疾病を問わず理学療法の専門的な基礎知識の必要性の認識を持っていることを示している。しかしながら、対象者がこれらの知識を持っているかという問いに関しては“義足の運動学”、“義足歩行”、“義足の異常歩行”では2割程度と非常に少なく、義足の知識（運動学・義足歩行）に対する理想と実際のギャップにおいて、「大いに持つべき」と「大いに持っている」の間には、74～79pt程度の差があった。

運動学や歩行に関する知識は理学療法士の専門領域であるが、「義足」に関わる理学療法業務は対象者が他の疾病に比較して少なく、経験に基づく知識を保持することが難しいことがギャップを生む原因として考えられる。その他、「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」、「勉強会など施設内での研修会が少ない」、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」などが挙げられた。これらより、卒前卒後を通じて「義足」に関する教育体制の再構築が急務であると考えられる。

一方、“義足の運動学”、“義足歩行”、“義足の異常歩行”の知識において「持つべき」と「持っている」との間は、約12～23ptの差であった。これは、理想とする知識レベルに対して対象者の自己評価では、自信を持って兼ね備えているとは断言できないが、必要最低限の知識を保有していることが示唆された。

義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力について、「大いに持つべき」が79.3%、「多少持つべき」が20.7%で「持つべき」合計が100%、“義足を活用した歩行練習の技術”では、「大いに持つべき」が93.1%、「多少持つべき」が6.9%で「持つべき」合計が100%であり、対象者全員がこれらの能力を「持つべき」と回答している。これは、切断者を支援する際に義足歩行を評価することが理学療法士の専門性であり大きな役割であるという認識の現れと推察する。しかしながら、対象者がこれらの能力を「大いに持っている」と答えた割合は、“義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力”では11.5%、“義足を活用した歩行練習の技術”では23.1%であった。このように、義足歩行評価能力や歩行練習技能に対する理想と実際のギャップにおいて、「大いに持つべき」と「大いに持っている」の間には、68～70pt程度の差があった。前述した項と繰り返しになるが運動学や歩行に関する知識は理学療法士の専門領域である。しかし「義足」に関わる理学療法業務は他の疾病と比較して少なく、経験に基づく知識を保持することが難しいことがこの大きなギャップを生むと推察される。

その他のギャップを生じさせる原因として、「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」、「勉強会など施設内での研修会が少ない」、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」などが挙げられた。これらよ

り、卒前卒後を通じて「義足」に関する教育体制の再構築が急務であると考える。

一方、義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力および義足を活用した歩行練習の技術において「持つべき」と「持っている」との間は、約27～39ptの差に留まった。これは、理想とする能力・技術レベルに対して対象者の自己評価では、自信を持って兼ね備えているとは断言できないが、必要最低限の能力・技能を保有していることが示唆された。

理学療法士に必要とされる義足の知識（運動学・義足歩行・異常歩行）・能力（歩行評価）・技術（歩行練習）を横順位別で比較すると、理想と実際のギャップの生じる理由は、「対象となる患者・利用者が少ない」が80～90%程度、「勉強会など施設内の研修会が少ない」が60～70%程度、「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」が50～60%程度、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」が40～60%程度であった。その理由として、全項目で「対象となる患者・利用者が少ない」が最も多かった。次いで、全項目で卒前・卒後において学ぶ機会が少ないことが多かった。なお全項目において「差が生じていない」と回答するものは少なかった。

これらより「義足歩行」に関する知識・能力・技術ともに、日常的な理学療法業務においてその成果を確認できる対象者が他の疾病に比較して少ない上に卒前卒後を通じて「義足」に関する教育体制が整備されていないことが大きな課題として考えられる。

理想と実際のギャップが生じる理由において、理学療法士に必要とされる義足の知識（運動学・義足歩行・異常歩行）・能力（歩行評価）・技術（歩行練習）項目を縦順位別で比較すると、「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」、「勉強会など施設内の研修会が少ない」、「対象となる患者・利用者が少ない」では、全項目において著明な差がなく50～90%程度の高値であった。これは、どの義足歩行に関する知識・能力・技術においても卒前卒後を通じて教育体制が整備されておらず、また、日常業務においてその成果を確認できる対象者が他の疾病に比較して少ないことが推察された。また、「雑誌や論文などの情報が少ない」、「施設に試す備品が少ない」では、全項目において著明な差がなく30%程度であった。これは、施設によって参考となる雑誌や論文の整備および試行するための備品類の整備には差があることが推察された。その他、「主に他職種が関わっている」では、7～28%と低値ではあるが、その中では「義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力」が最も高かった。これは、義足の選択や調整時において義肢装具士などの他職種と連携が必要であることの現れと推測するが、その数値が30%未満であることより義肢装具士などとの連携が十分に図られていないことも推察された。最後に「差が生じていない」では、全項目において7～15%と低値であった。これは、理学療法士が切断者を支援する中で義足に関する知識・能力・技術の全てにおいて自信をもった対応ができていないという認識の表れであると推察した。また、義足の破損や衛生管理、義足使用による断端トラブルの管理など、義足への関わりが強く、かつ実務で課題となる問題については、卒後の研修の必要性を求める意見が多く見受けられる。

理想と実際のギャップが生じる理由において、理学療法士に必要とされる義足の知識（義足の生活関連動作：移乗・入浴、義足作製・修理に関する制度、義足に関する相談先）義足に使用に関して切断者本人や家族に説明する能力の項目で比較すると、「理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない」は「義足の使用に関して他職種（医師、義肢装具士、ケアマネージャ等）に説明する能力」、「協会や県士会など施設外の研修会が少ない」は「義足を生活関連動作（移乗動作、入浴動作等）に活用する知識」、「勉強会など施設内の研修会が少ない」は「義足の使用に関して他職種（医師、義肢装具士、ケアマネージャ等）

に説明する能力」、「雑誌や論文などの情報が少ない」は「義足を生活関連動作（移乗動作、入浴動作等）に活用する知識」、「対象となる患者・利用者が少ない」は「義足の使用に関して他職種（医師、義肢装具士、ケアマネージャ等）に説明する能力」、「施設に試す備品が少ない」は「義足を生活関連動作（移乗動作、入浴動作等）に活用する知識」と義足の使用に関して他職種（医師、義肢装具士、ケアマネージャ等）に説明する能力、「主に他職種が関わっている」は「義足作製・修理に関する制度（社会保険制度・障害者総合支援法等）の知識について」、「差が生じていない」は「義足を生活関連動作（移乗動作、入浴動作等）に活用する知識」が最も多い。

義足の作製・修理に関する制度（社会保健制度・障害者総合支援法等）の知識について、特筆すべきは、認識の差（「持つべき」と「持っている」の間に生じるギャップ）の理由として、主に他職種が関わっていることを理由とする者が、他の質問に対して51.7%（第3位）と多いところにある。（他の質問では平均18.8%）これは、理学療法士の知識保有率が明らかに低いとする認識とともに、制度（社会保険制度・障害者総合支援法等）を知ることに対しての問題意識の低さが伺える。半田（1997年）は、福岡県の理学療法士を対象に「補装具における理学療法士の相談相手は誰か」について調査した結果、医師よりも義肢装具士と多くの情報交換を行っている¹⁾と報告している。つまり、実際に義足に関する制度（支給ファンドや時期、価格など）をフォローする場面は義肢装具士が多くを担う可能性があり「実務における事実」を反映した結果ともとれる。しかしながら、豊田ら（2015年）は、理学療法士に求められる役割を再考する目的で調査を行い、治療用補装具の製作時期において「義肢装具士が理学療法士に求めること」を明らかにしている²⁾。その中では「義肢装具に関する制度を理学療法士に知ってもらいたい」とするニーズが上位にくる結果であった。理学療法士が専門とされる身体機能・能力評価を十分に発揮するためには、用意できる義足の構成要素が重要となる。義足は病期を経て、長期に使用する福祉制度に繋がるが、手続きや判定（更生相談所の判断）の詳細が、後の費用負担、義足パーツの選択幅に大いに影響を与えるため、理学療法士が義肢の給付制度を理解することは、切断者に対するサポートの連続性をもって行うために非常に重要である³⁾と考える。理学療法士にとって日頃から関わりが少ない義足支援であればこそ、必要とされた時に標準的理学療法サービスの質を担保するための理学療法の専門領域となる知識技術のブラッシュアップが必要な領域である。

【引用文献】

- 1) 半田一登：義肢装具に対するチームアプローチ－理学療法士の視点から－，日本義肢装具学会誌. 1997;13(2):109-111
- 2) 豊田 輝, 梅澤 慎吾, 岩下 航大：補装具を用いたリハビリテーションにおいて理学療法士に求められる役割の再考－義肢装具士へのアンケート調査結果から－理学療法学. Supplement 2014(0); 0259

資料

1. 依頼文

日本理学療法士協会
会員の皆様

義肢における理学療法士の関わりの実態調査
【ご協力のお願い】

拝啓、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素は本会の活動にご理解とご協力を
たまわり、誠にありがとうございます。

日本支援工学理学療法学会では公益社団法人日本理学療法士協会からの依頼により、義足に関
する啓発と教育を目的に実態調査を実施いたします。得られた結果は、今後の福祉用具・義肢・
装具支援の啓発と教育に活用し、義足における理学療法士の活躍と社会的認知の向上に向けて
努めていく所存です。

お忙しい中大変恐縮ではございますが、本調査の趣旨をご理解いただき、ご協力いただきます
様、よろしくお願い申し上げます。

1. 目的： 本調査は、義足に関する理学療法士個人の活動実態を把握し、啓発と教育に向け
た活動の基礎資料を得ることを目的といたします。
2. 回答者： 日本理学療法士協会より回答依頼が届いた本会会員。
3. 調査期間： 倫理審査承認日～3月31日土曜日
4. 回答方法： Web またはメール郵送にて回答お願いいたします。
5. 調査項目： 確認方法については次ページをご参照ください。
6. 本件事業および回答方法等に関するお問い合わせ先
日本理学療法士協会
支援工学学会調査担当
academics@japanpt.or.jp

義肢における理学療法士の関わりの実態調査

【回答にあたっての確認事項】

回答するにあたって、下記条件を必ず、ご確認下さい。

1. 本調査は、日本支援工学理学療法学会が、義肢における理学療法士の関わりの実態を調査いたします。
2. 回答者は原則、日本支援工学理学療法学会より選出された本会会員です。
3. 本アンケートは、回答後の撤回も可能です。
回答後の撤回を希望される方は本件事業および回答方法等に関するお問い合わせ先へご連絡ください。
4. 研究計画書および研究の方法に関する資料の入手または閲覧については、問い合わせ先までご連絡ください。
5. ご回答いただいた内容は、次のように取り扱うことをお約束いたします。
 - ① 調査研究目的以外には使用いたしません。
 - ② ご回答いただいた内容は匿名化を行い、統計的に処理し、ご回答者が特定できないようにいたします。
 - ③ 自由記載の内容も、個々の回答者が特定されないよう配慮し、データ化いたします。
 - ④ ご回答いただいた内容は本研究者にて保管し、調査終了後に廃棄を実施いたします。
 - ⑤ 調査への拒否があってもご回答者に不利益が生じることは一切ございません。また、一度承諾いただいた後も随時これを撤回することができます。
 - ⑥ お答え頂いた内容によって、ご回答者様およびご回答者様が所属するご職場の評価が行われることは、一切ございません。
 - ⑦ 回答をもって、調査への同意が得られたものとします。
 - ⑧ 本研究が終了後、結果は当学会ホームページにて公開いたします。
 - ⑨ 本研究に公表すべき COI はございません。

2. 調査項目

理学療法士の義足支援に関する実態調査

I. 貴施設の概要について

1. あなたが現在、主に勤務している職場の種類をお答えください。(回答は1つ)

- ①急性期病棟 ②回復期リハ病棟 ③療養病棟 ④訪問 ⑤老健(入所) ⑥通所介護(デイサービス)
⑦通所リハ(デイケア) ⑧その他()

2. 前項1. でご回答いただいた職場の理学療法士の人数をお答えください。

- ①10人未満 ②10人以上20人未満 ③20人以上30人未満 ④30人以上

3. あなたの臨床経験年数をお答えください。

- ①3年未満 ②3年以上6年未満 ③6年以上10年未満 ④10年以上

4. あなたが日常的に関わっている主な疾患をお答えください(3つ以内)。

- ①脳血管障害 ②脊髄損傷 ③運動器疾患 ④廃用症候群 ⑤神経難病 ⑥脳性麻痺
⑦内部疾患 ⑧小児疾患 ⑨虚弱高齢 ⑩その他()

5. 施設において前年度1年間で理学療法対象となった下肢切断は入院、外来含めて何例いましたか

- ①0例 ②1~5例 ③6~10例 ④11~20例 ⑤21例以上

6. あなたが今までに関わった義足の種類についてお答えください(複数回答可)。

- ①股義足 ②大腿義足 ③膝義足 ④下腿義足 ⑤足袋義足 ⑥その他()

義足について

7. あなたが日常業務において、義足の ①使用、②作製、③調整に関わることはどの程度ありますか

- 1) 使用 ①ほぼ毎日 ②1週間に1回程度 ③月に1回程度 ④ほとんど関わらない
2) 作製 ①月に1回以上 ②3か月に1回程度 ③半年に1回程度 ④ほとんど関わらない
3) 調整 ①月に1回以上 ②3か月に1回程度 ③半年に1回程度 ④ほとんど関わらない

8. 問3で③、④を選ばれた6年以上経験された方へ、就職当時と比較して下肢切断者数について

- ①激減している ②やや減っている ③変わらない ④やや増えている ⑤激増している

II. 以下の義足に関するスキル(知識・技術・能力)のうち、あなたは理学療法士がどの程度持つべきだと考えますか。また、あなたはどの程度スキルを持っていると思いますか。そしてこれらの差が生じる理由をお答えください。

1. 義足使用の意義・目的についての知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない
⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない ⑦主に他職種が関わっている
⑧その他() ⑨差は生じていない

2. 義足の種類(ソケット、継手、足部等)と適応についての知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない
⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない
⑦主に他職種が関わっている ⑧その他() ⑨差は生じていない

3. 義足の部品(ソケット、継手、足部等)の種類と適応についての知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない
⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない
⑦主に他職種が関わっている ⑧その他() ⑨差は生じていない

4. 義足の使用に関わる疾患や病態に関する知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない
⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない
⑦主に他職種が関わっている ⑧その他() ⑨差は生じていない

5. 義足の使用に関わる機能解剖学(切断術等)に関する知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない
⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない

⑦主に他職種が関わっている ⑧その他（ ） ⑨差は生じていない

6. 義足の運動学（重心・支持基底面・モーメント等）に関する知識について

1) 持つべきか

①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない

③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない

⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない

⑦主に他職種が関わっている ⑧その他（ ） ⑨差は生じていない

7. 義足歩行の知識について

1) 持つべきか

①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない

③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない

⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない

⑦主に他職種が関わっている ⑧その他（ ） ⑨差は生じていない

8. 義足の異常歩行の知識について

1) 持つべきか

①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない

③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない

⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない

⑦主に他職種が関わっている ⑧その他（ ） ⑨差は生じていない

9. 義足の選択や部品の調整時における歩行を評価する能力について

1) 持つべきか

①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない

- ③勉強会など施設内の研修会が少ない
- ④雑誌や論文などの情報が少ない
- ⑤対象となる患者・利用者が少ない
- ⑥施設に試す備品が少ない
- ⑦主に他職種が関わっている
- ⑧その他（ ）
- ⑨差は生じていない

1 0. 義足を活用した歩行練習の技術について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき
- ②多少持つべき
- ③あまり持たなくてよい
- ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている
- ②多少持っている
- ③あまり持っていない
- ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない
- ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
- ③勉強会など施設内の研修会が少ない
- ④雑誌や論文などの情報が少ない
- ⑤対象となる患者・利用者が少ない
- ⑥施設に試す備品が少ない
- ⑦主に他職種が関わっている
- ⑧その他（ ）
- ⑨差は生じていない

1 1. 義足の使用可否についての評価能力について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき
- ②多少持つべき
- ③あまり持たなくてよい
- ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている
- ②多少持っている
- ③あまり持っていない
- ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない
- ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
- ③勉強会など施設内の研修会が少ない
- ④雑誌や論文などの情報が少ない
- ⑤対象となる患者・利用者が少ない
- ⑥施設に試す備品が少ない
- ⑦主に他職種が関わっている
- ⑧その他（ ）
- ⑨差は生じていない

1 2. 義足の破損、不適合に関する知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき
- ②多少持つべき
- ③あまり持たなくてよい
- ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている
- ②多少持っている
- ③あまり持っていない
- ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない
- ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
- ③勉強会など施設内の研修会が少ない
- ④雑誌や論文などの情報が少ない
- ⑤対象となる患者・利用者が少ない
- ⑥施設に試す備品が少ない
- ⑦主に他職種が関わっている
- ⑧その他（ ）
- ⑨差は生じていない

1 3. 義足使用による断端や足部の創傷と対応についての知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき
- ②多少持つべき
- ③あまり持たなくてよい
- ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている
- ②多少持っている
- ③あまり持っていない
- ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない
- ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
- ③勉強会など施設内の研修会が少ない
- ④雑誌や論文などの情報が少ない
- ⑤対象となる患者・利用者が少ない
- ⑥施設に試す備品が少ない
- ⑦主に他職種が関わっている
- ⑧その他 ()
- ⑨差は生じていない

1 4. 義足ソケットの汚れや除菌など衛生管理についての知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき
- ②多少持つべき
- ③あまり持たなくてよい
- ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている
- ②多少持っている
- ③あまり持っていない
- ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない
- ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
- ③勉強会など施設内の研修会が少ない
- ④雑誌や論文などの情報が少ない
- ⑤対象となる患者・利用者が少ない
- ⑥施設に試す備品が少ない
- ⑦主に他職種が関わっている
- ⑧その他 ()
- ⑨差は生じていない

1 5. 義足着脱方法に関する知識について

1) 持つべきか

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき
- ②多少持つべき
- ③あまり持たなくてよい
- ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている
- ②多少持っている
- ③あまり持っていない
- ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない
- ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
- ③勉強会など施設内の研修会が少ない
- ④雑誌や論文などの情報が少ない
- ⑤対象となる患者・利用者が少ない
- ⑥施設に試す備品が少ない
- ⑦主に他職種が関わっている
- ⑧その他 ()
- ⑨差は生じていない

1 6. 義足を生活関連動作(移乗動作、入浴動作等)に活用する知識について

1) 持つべきか

- ①大いに持つべき
- ②多少持つべき
- ③あまり持たなくてよい
- ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

- ①大いに持っている
- ②多少持っている
- ③あまり持っていない
- ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

- ①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない
- ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない
- ③勉強会など施設内の研修会が少ない
- ④雑誌や論文などの情報が少ない
- ⑤対象となる患者・利用者が少ない
- ⑥施設に試す備品が少ない
- ⑦主に他職種が関わっている
- ⑧その他 ()
- ⑨差は生じていない

1 7. 義足の使用に関して切断者本人や家族に説明する能力について

1) 持つべきか

①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない

③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない

⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない

⑦主に他職種が関わっている ⑧その他() ⑨差は生じていない

18. 義足の使用に関して他職種(医師、義肢装具士、ケアマネージャ等)に説明する能力について

1) 持つべきか

①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない

③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない

⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない

⑦主に他職種が関わっている ⑧その他() ⑨差は生じていない

19. 義足作製・修理に関する制度(社会保険制度・障害者総合支援法等)の知識について

1) 持つべきか

①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない

③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない

⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない

⑦主に他職種が関わっている ⑧その他() ⑨差は生じていない

20. 義足に関する相談先についての知識について

1) 持つべきか

①大いに持つべき ②多少持つべき ③あまり持たなくてよい ④ほとんど持たなくてよい

2) 持っているか

①大いに持っている ②多少持っている ③あまり持っていない ④ほとんど持っていない

3) 差が生じる理由(複数回答可)

①理学療法士養成校で学ぶ時間が少ない ②協会や県士会など施設外の研修会が少ない

③勉強会など施設内の研修会が少ない ④雑誌や論文などの情報が少ない

⑤対象となる患者・利用者が少ない ⑥施設に試す備品が少ない

⑦主に他職種が関わっている ⑧その他() ⑨差は生じていない

義肢における理学療法士の関わりの実態調査

報告書

調査対象 会員 平成31年3月

発行：日本理学療法士学会 日本支援工学理学療法学会

〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷 3-8-5 公益社団法人日本理学療法士協会内

TEL 03-6804-1626 (直通)

FAX 03-6804-1627

<http://www.japanpt.or.jp/>